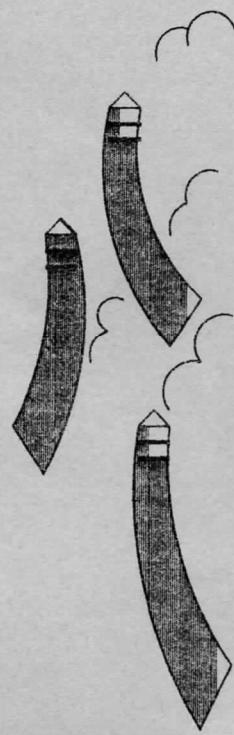
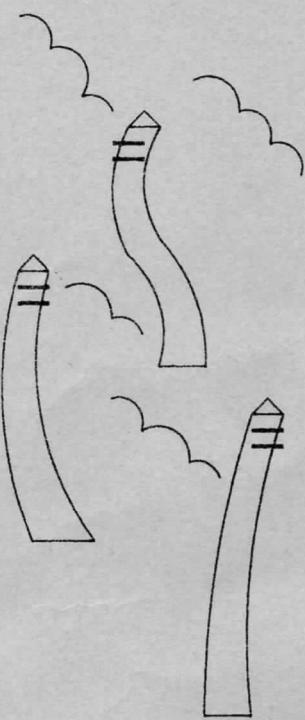


平家物語と謡曲



まえがき

NHKの「炎たつ」を孫と見ていたとき、孫がなぜ義経が平泉へ行ったのだと言う話から、謡に色々と義経が出てくるよと「橋井慶一」の謡の本を見せて話したところ面白そうだと言うので、丁度学校で「平家物語」を習っているので、「能に出てくる源義経」を書いてやり、そのとき、まったく久し振りで平家物語を読んだのです。学生以来何十年ぶりに読んだ平家物語は、あゝここは謡であの曲だが、こんな話がその背景にあったのかと、非常に面白く、それを書いてみようという気になりました。

初めは、孫を対象と考えました。しかし、よく考えると、謡曲一曲づゝについてはある程度のことは知っていますが、その前後のことは、など、なぜ、この曲がと思うようなことがあります。例へば、咸陽宮がなぜ出るのか、祇王、仏御前が最後はどうなるのか、木曾義仲と最後の巴のその後、その他謡曲にはないことや、梶原景時の謡言は福島の逆櫓とされていますが、それ以外に二人の静いなどが物語にあります。

謡と平家物語と全く同じ文章を使われていたりしますが、それ以外の言葉では表現が出来ないほど、美しい文章に出会ったり、七五調の叙情詩調のよさ、読めば読むほど面白くなり、孫を対象としないで、自分の謡の勉強のひとつとして書き始めました。謡仲間に平家物語の中から三十余曲が謡われていると話しましたら、そんなにありますのか。出来上がれば是非欲しいと言われ、非常に励みになり、作りあがつたものの善し悪しよりも、謡曲の文章の良さがしみじみと分かりました。

※咸陽宮 かんようぎゅう

※謹言
※諳い
ざんげい

平家物語と謡曲

付記 天皇名・年号表

碇	潛	(いからかずき)
大原御幸	(おおはらごこう)
正尊	(しょうそん)
船井慶	(ふなへんけい)
忠信	吉野靜	(ただのしづか)
二人	静	(ふたりしづか)
曲	(おんぎょく)
阿古屋	の松	(あこやのまつ)

一一一
四四四三三二一
七五〇六一五九

平家物語と詠曲

俊寛

詠本には、平家物語卷二「足摺の事」に據つたものであると書いてあります。「足摺の事」は巻三です。

「御産の巻の事」に同じき十一月十二日の寅の刻より、中宮御産の氣ましますとて（中略）先例も、女後、后、御産の時に臨んで大赦ありき、大治二年九月一日の日、待賢門院御産の時、大赦行はるゝ

事あり。今度もその例とて、非常の大赦行なわれて、重科の輩多く

赦されける中に、この俊寛僧都一人、赦免なかりける事こそうたでけれとあります。

さて「あはれ都に在りし時は、法勝寺、法成寺」とありますが、俊寛は法勝寺の執行でした。その頃の叙位、徐目は院や主上のお考えによらず、全く平家の専断になつてゐるなど平家は横暴でありました。それで平家滅亡の計りごとを東山の麓の鹿谷といふ俊寛の山荘で行

※治承二年（一二七八）
建礼門院

当時は中宮であつた。

※大赦による許し

なわれていました。この山荘はうしろは三井寺までつゞく要害無比

（卷一）鹿の谷の事

の城郭^{じょうかく}であつたとあります。ある夜、御白河法皇も御幸なつたとき、
※大納言^{おほのくわん}成親^{せいしん}が前に合つた瓶子を倒しました。法皇がどうしたことかと言わ

※瓶子：お酒を入るもの

れたとき、大納言が「平氏が倒れました」と答へたので法皇ご機嫌^{きげん}よく、誰か猿樂^{さるがく}を舞えといわれ、平判官康頼が「ああ、あまりに

瓶子（平氏）が多く候ゆえ、酔いて候」と云うと、俊寛が「さてその瓶子をいかがいたさん」と、つゞけて西光法師が「たゞ首を取るにはしかじ」と立つて、瓶子の首を割つてしまつたとあります。

俊寛の祖父はひどく根性の曲がつた人であつたそうで、俊寛も僧の身ながら、気性もたけだけしく傲慢^{ごまん}であつたと書かれています。

成親大納言は、山門の騒ぎ^{（略）}で、平家転覆^{てんぶく}の陰謀^{いんぼう}をいちじ押さへていた、そもそも内議支度^{（略）}は様々なりしかども、擬勢^{ぎせい}ばかりで、この謀反叶ふべしとも見えざりければ、多田の蔵人行綱、この事無益な
りと思ふ心や付きにけん、つらつら平家の繁盛する有様を見るに、

1月1日
「挺たつ」で讀じて
した

※内相談や準備
※みせかけばか
り

当時たやすう傾け難し、もしこの事漏れぬる程ならば、行綱まず失はれんなんず、他人の口より漏れぬ先に返り忠して、命生かうと思うふ心ぞ付にける。ということで清盛に告げたのです。

清盛は謀反に組した大勢のものを召し捕らへても胸がおさまらず、

*鎧兜を付けて「あの成親が謀反は事の数にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。しばし世を静めんまで法皇をば、鳥羽の北

殿へ遷しまいらするか、しからずば、これへまれ御幸をなし参らせ

んと思ふはいかに」というと、重盛そのとき、はらはらと涙を流し

て「御運も早末になりぬと覚え候。人の運命の傾かんとては、必ず

悪事を思ひ立ち候なり」平家がこゝまで栄えたことはみな

君のお陰である、君も必ず考え方されるだらうし、道理と非道を比べれば、道理につくのが当然だと諫めます。清盛は重盛と仲たがえしては具合が悪いと思い止まります。

成親大納言のほか、処罰をされたものは数少なくなく、俊寛、丹

*御企み

波の少将成経、平判官康頼は薩摩潟の鬼界島へ流されます。

丹波の少将成経、平判官康頼は島で、毎日山所權現に参り祈念していました。そして康頼は次のような和歌を読みます。

薩摩潟沖の小島にわれありと 親には告げよ八重の潮風

思ひやれしばしと思ふ旅だにも なはふるさとは恋しきものを

これを卒都婆そとばに書き、海へ流したが、その一つが、安芸の嚴島神社に流れつき、ある僧が都へ届け、それが重盛から清盛に見せられた。

入道も、木石ならねば、さすがあはれにこそと宣ひけれどあります。

一番最初に書いたように、中宮の慶事けいじのため大赦が行なわれることになりますが、俊寛については、清盛は「俊寛はこの入道がひとしお目に掛けていた男である、所もあろうにしかるに、おのれが山庄に寄り合して、奇怪なる振舞きみをなすとはなにことかと」許さなかつたとあります。

これより先は平家物語卷三「足摺の事」に

硫黄島

佐多岬より南西50軒

謡では

三熊野

※平家譜の領地肥前國から衣食を送られ難命をつない

だ。

成経頼は權現に心懶く
この島に三所權現を祭ろうと
したが、健實不似^{ふしき}第にて
これを用いたある
那智の山に似たところを
郡智の御山とし毎日二人
は三所權現奉りをした

『俊寛と云う文字はなし、禮紙にやあるらんと』か『我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり』『平家の思ひ忘れかや、執筆の筆の誤りか』と書かれていますが、謡曲の「俊寛」のクセに【前に読みたる巻物を、また引き抜き同じ跡を、繰り返し繰り返し、見れども見れどもたら成經康頼と、書きたるその名ばかりなり。もしも礼紙にやあるらんと書き返してみれども、僧都とも俊寛とも書ける文字は更に無しこは夢かさでもゆめならば覚めよ覚めよと現なき俊寛が有様を見るこそ哀れなりけれ】と謡はれ一つの見処です。

その後、謡曲では、成經康頼が赦免舟しゃめんに乗るのですが、『僧都も舟に乗らんとて、康頼の袂に取りつけば、僧都は船に叶うまじと、さも荒げなく云ひければ、うたてやな公おなみけの私と云うことのあれば、せめては向かいの地までなりとも、情に乗せてたび給へ、情を知らぬ舟子ども櫓櫛とうそくを振り上げ打たんとす、さすが命の悲しさに、また立ち返り出船の、纜に取りつき引きとむる、舟人纜押しきつて、舟を

ともづな

深みに押し出だす、せん方波に揺られながら、たゞ手を合わせて舟のなう、舟よと言えば乗せざれば、力及ばず俊寛は、もとの渚にひれ伏して……声も惜しまず泣き居たり」と謡曲では一番の劇的な表現としていりますが、平家物語では、「すでに櫂解いて舟を押し出せば、僧都は網に取り付き、腰になり、脇になり、丈の立つまで引かれ出づ。丈も及ばずなりければ、舟に取り付き「さていかに、おのおの、俊寛をばついに捨て果て給ふか。許されなければせめては九国の國まで」とくどかれければ、「いかに、叶ひ候まじ」とて取り付き給ひつる手を引き退けて、……せんかたなさに、渚に上がり倒れ伏し、喚めき叫び給へども、漕ぎ行く舟の跡白波ばかりなりとあります。

そして舟も漕ぎ廻れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥所へも帰らず、波に足うち洗はせ、露にしおれて、その夜はそこに明かしける、その瀬に身を投げざりし心の中こそはかなけれとこの頃はむすんでいます。

さてその後、俊寛はどうなつたのでしよう。僧都の幼うより不便にして召し使はれける童あり。名をば有王と申しける。僧都の御娘の忍うでおわしける所へ参りて、「今はいかにしてもかの島へ渡りて、御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はつて参り候はん」と娘御の文を持ち、薩摩へ下り、かの島へ渡る船津で、人に怪しまれ、着物を剥ぎ取られしたが、姫君の手紙だけは、もと結いに隠し島へ渡つた。都でうすうす聞いた話どころでなく、田も畠も村もない言葉も通じないところであつた。尋ねあるいたが、「あそこよこよとまよひ歩きしが、その後は行方をも知らず」という事であつた。

ある朝、磯の方より蜻蛉とんぼなんどの如くやせ蓑みのへたる者、よろぼひい出たり。都にて多くの乞がい人は見しかども、かゝる者はいまだ見ず、我餓鬼道えがきどなどへ迷ひきたるかとぞ思う。もしかもしか御行く方を知つたるかとたずぬ。「これこそそれよ」と手に持てるものを投げ捨て、砂の上にぞ倒れ臥すと、そこで有王は初めて主人の行方を

知ったのです。「ひとまず我が家へ」という事で、有王は俊寛を背に負い、松の木が一むらはえているなかに、竹を柱に、葦を束ねて梁のかわりに渡し、上にも下にも松の葉をぎっしり詰めてあるだけの小屋でとうてい雨風を防げそうに見えなかつた。昔、法勝寺の執行のときは、八十余ヶ寺の莊園を司り、棟門、平門の中で四、五百人の従者^{けんざく}奉仕に囲まれ、信者の布施をうけながら、修業をつとめなかつた信施無慚の罪によつて、早くもこの世でその報いを受けておられるのかと思うのであつた。

有王は奥方が苦労され、三月二日に亡くなつたことや、姫君の手紙を見せました。俊寛は「この上は生きながらへても、皆に苦労さすばかりだ、それも情け知らずと言つものだ」と、みずから絶食し、ひたすら阿弥陀仏を唱へ、臨終にも心を乱さず生涯を閉じました。

年三十七才でありました。

※信者からの布施を受けながらみづから反省したこと

祇王せう（妓王）（ほけのきみ） 仏原ほとけのさと（卷一 祇王のこと）

『祇王』は宝生流、金剛流のみ、『仏原』は觀世流、金春流のみで喜多流はいづれも現行曲としてはない。シテは『祇王』も『仏原』も仮御前である。『祇王』ではツレが祇王として出てくる。

さて清盛は、仁安二年十一月十一日、五十一歳で病におかされ、命ながらえるために、出家入道して、淨海じょうかいと名のつた。その効驗こうげんか、宿痾しゆくわたちまち癒いやえた。出家したのちも榮耀えいようとはなお尽きず、吹く風が草木をなびかすように、また降る雨がくまなく国土をうるおすがごとくに、だれひとりとして清盛を仰ぎ敬わないものとてなかつた。かく天下を掌中じょうちゆうにおさめた清盛には、世のそしりをもはばからず、人のあざけりをもかえりみぬ、奇怪きがいな行ないが多かつた。

当時、都に名の聞こえた白拍子の名手で、祇王、祇女（せうめ）という姉妹がいた。その祇王を清盛は寵愛ちゅうあいした。『祇王』の曲のクセに『こゝに平相國、清盛の朝臣（せうじん）とて、今の世の武将（ぶしょ）たり、たれかは恐れざるべ

※持病

き、金玉玉殿に、美女の数を集めでは、漢宮四臺※かんぐうよんたいもこれにはいかで

※漢の王宮
※男女の契りの
深いことをい
う

勝るべき。中に祇王は好色の。その名にめでゝ參殿の。初めよりも

※

色深く。比翼連理のその契り』と語っている。

※美人

そもそも我が朝に白拍子の始まつたのは、鳥羽院の御代に、島の千歳とせ・和歌の前なる二人が舞つたのが始めてである。当初は、水干すいかんに立鳥帽子、白鞘巻を差して舞い、男舞と言われた。ところがしばらくたつと鳥帽子と刀を廃し、水干だけとなつた、それゆえに白拍子の名を得た。このことは祇王の能の『間狂言』でも喋りがある。

京中の白拍子は、祇王をうらやむものあり、そねむものあり、また祇の字をつけてあやからうとした。

かくて三年といふに、また、白拍子の上手一人出でたり、加賀の国のの仏とぞ申しける。年十六とぞ聞こえし。京の人はみな、多くの白拍子を見たが、これ程の上手な舞いを見たことがないと、しきりにもてはやした。仏御前はあるとき、

「われ天下にもてあそばるゝと云えども、當時めでたう栄えさせ給ふ平家太政の入道殿へ、召されぬことこそ本意なけれ。遊物の習ひ、何か苦しかるべき。推参してみん」と、西八条の清盛の邸へ伺つた。

取り次ぎの者の言上を聞き、清盛は氣色をそこねて

「何だ、さような遊び女は人様に召されて参るものだ。その上祇王のおるところに、仏であろうが神であろうが許しはせぬ。とつとと帰れ」と云われ、仏御前はやむなく帰りかけたが、祇王のとりなしで、それでは、とにかく今様でも一つ歌つてみよ、ということになつた。能の『祇王』では、入道に仕える瀬尾三郎という者に、仏御前が清盛に会いたいと頼む、『淨海の御詫』には、いかなる神なりとも仏なりとも、祇王があらんほどは御対面かのふまじき由仰せ候處に祇王の御申しには、しづれも流れをたつるは同じことにて候へばなくでは叶ふまじき由たつて御申し候ひて、この四五日は出仕をとめ給ひて候』それで清盛は、仏御前に会うこととしたので、瀬尾

※今様・新たに
流行り出した

三郎が祇王と仏御前を迎えてゆく。能では、それから二人で清盛の前で相舞することになる。舞は中之舞いである。

舞がおわり、更に仏御前一人で舞えと言われる。祇王は「わらははこゝにいても由なし」と家へ帰ろうとすが、瀬尾に、それでは淨海殿の機嫌もいかゞかと止められる。

仏御前はみめかたち美しく、声もよく、節回しも巧みな名妓、舞もきたいにまさる出来栄えだったから、清盛は心を奪われたまち仏御前に情を移した。

『仏原』では『昔平相國の御時、妓王妓女仏刀自とて、温韻舞曲花めきて、世上に名を得し遊女ありしに、始めは妓王を召し置かれて遊舞の寵愛甚だしくて、色香を飾る玉衣の、袖の白露起臥の。御簾の内を立ち去らで、さながら宮女のことくなり、思はざる折を得て、仏御前を召されしより、御心移りて何時しかに妓王は出され参らせて、世を秋風の、音更けて、涙の雨も、をやみもせず』謡っている。

仏御前は、

「もともと私はお召しもないのに参上したもの。祇王御前のおとりなしで召し戻されたものを……早々においとまをお願いもうしう存じます」

「そのようなことはまかりならぬ。祇王にはばかって申すのか。その儀ならば、祇王にこそ暇をつかわす」と祇王は立ち去れとせかれるまゝに、三年も住み慣れたところなだけに名残惜しく、襖障子に萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草

いつれか秋にあはではつべき

と書き残し家に帰った。

この年も暮れ、あくる年の春を迎えた頃、入道相国より

「いかに祇王、その後はどうに過ごしているか、仏御前があまり所在なげに見ゆるゆえ、屋敷へ參つて仏の伽を勤めるよう」と使いをよこした。母の刀自のせつなすすめもあり、つらい出仕を

した。しかも清盛が「仏御前を慰めるため、今様を歌へ」という。
落ちる涙をおさへ、

仏も昔は凡夫なり 我らも遂には仏なり

いづれも仮性具せる身を 知らざりけるこそあわれなれ

と泣く泣く歌つた。座に連なる平家の一門公卿、殿上人、諸大夫、
みな感涙を催した。

祇王は二十一歳で尼になり、嵯峨の奥の庵で、念佛を唱え暮らすよう
になつた。祇女も、母の刀自も念佛三昧さんまいの生活をおくることになつ
た。

かくて春過ぎ夏たけぬ。秋の初風吹ぬれば、星合の空眺めつ
つ、天のとわたる梶の葉に、思ふ事書く頃なれや。夕日の影の西
山のはにかくるを見ても「日の入り給ふところは、西方淨土に
てあんなり。いつかわれらもかしこに生まれて、物を思はで、す
ぐさむらん」と、かかるにつけても過ぎにしかたのうき事ども、

思ひつづて唯つきせぬものは涙なり。たそかれ時も過ぎぬれば、
竹の編戸たけのへだを閉ぢふさぎ、灯かすかにかきたてて、親子三人念仏し
ていたるところに、竹の編戸をほとほととうちたたく者出て來た
り。この文はこの項の聞かせ所である。とくに「かくて春過ぎ夏
たけて以下の七・五調は日本の叙情詩の主張を作ってきた。
前にあるように、この庵の編戸をほとほととただく者があつた。
こわごわとをあけると思いがけず、仏御前であった。「これはと」
声をかけると仏御前は、

「もともと私は、みずから屋敷へ推参し、あなた様のおとりなしで
召され、しかも代わりに私があとにとめられたことの恥ずかしさ、
身のつらさ。これを見るにつけても、いつかはまたわが上にめぐり
来ることと思われ、あなたが襖障子に『いづれか秋にあはで果つべき』と書きおかけたお言葉、心にひしと感じております。いつぞや
あなたが屋敷に召されて、今様をお歌いなされたとき、つくづくと

うかれ女の身のつらさを、思い知られました。このほど噂で母子三人様、ご一緒に念仏されている由、聞くにつけてもうらやましく、いとまを願いましたが、入道殿お許しになりませぬ。この世の栄華は夢のうち、いちじの栄華を誇って、後生知らずと言われんも悲しく、今朝ひそかに屋形をぬけだして、このような姿になつて参りました」と被つていた衣をとりのけると、緑のかみをそり落として、尼の姿となつていた。そして

「このように姿を変えて参りましたからは、これ迄の罪をお許し下され、共に念仏称名し、一つの蓮の身となりたく、お許しなくば、いづ地へか迷い行き、いかならん苦のむしろ、松の根にも倒れ伏し、命あらんかぎり念仏して往生の本懐を遂げたく、心をきわめて参りました」とさめざめとかきくどきました。祇王は涙をおさえて、

「かほどまでに思い立たれたとは夢にも知らず、浮き世の定めと身の不運とあきらめればよいものを、ともすればあなた様のことを恨めしく存じました。今は恨みもなく、わずか十七歳の身で穢土をい

※極楽の蓮の上
に乗る身

とい、淨土を願おうと思ひ定められたのは、眞実の大道心、まことの善知識と申しましよう、ともに心を会わせて、極樂往生を祈ろう

※人間として
眞の心

ではありますんか」と、四人はそれよりおなじ庵に暮らし、一心不乱に淨土を祈りました。御白河法皇御創建の長講堂の過去帳に「祇王、祇所、刀自らが尊靈」と四人一緒に書き收められてゐる。

『仏原』のクセの上羽に『思ひの外なる仏御前の様を変へ来たりたり、こはそもそもにても斯く捨つる身となりぬれど、なおも御身の怨めしさの執心は残るにそもかゝる心持つ人かや。今こそ眞の仏にてましませとて、妓王は手を合わせ感涙を流すばかりなり』と謡つてゐる。

平家物語の盛者必衰の思想をこの祇王物語でも、つらぬいてゐる。

『祇王』は華やかさを謡い、『仏原』は物語の後半の妓王、仏の極楽往生の願いを謡つてゐると思われる。その華やかさを『祇王』は中之舞を舞い、「仏原」哀れさを序の舞で舞うといふ違ひもある。

「平家物語」（杉浦明平記より）

鎌倉時代中頃より「平家物語」はかなりひろく流行していたようだが、それは文字に書かれた本として普及したのではなく、盲法師が琵琶を弾き語りして伝わったと言われている。言葉にはある程度のリズムを付けることで、聴手に快感を与える。平家物語にはそういう語りもの特有の性格が今も残っている。

原作者は、はっきり分かつてない。「徒然草」によると、御鳥羽院のとき、信濃前司行長というものがつくって、生仮といいう盲法師に教えて語らせたということになつていて。

ところがこの信濃前司行長は出家してから天台座主の慈鎮の扶持を受けていたと言う以外に素性も伝記もさっぱり分かつてないということだ。

頼政

平家物語卷四「源氏揃へ」に、御白河法皇の第三皇子、以仁親王は御母は加賀大納言季成郷の御むすめであり、三条高倉にましましければ、高倉の宮と申しけり。御年十五にてひそかに御元服あり。

故建春門院のねそみを受け、世に出ることなく治承四年、御年三十になられた。源三位頼政がある夜密かにこの以仁王をたずね「あなた様は本来東宮にも立ち、天位にも即かせ給うべかりし人の、三十六宮にて渡らせ給うこと、残念とは思し召され候はずや、はや御謀反を起させ給ひて、平家を亡ぼし、いつまでも鳥羽殿におし籠め給はせられる法皇の御憤りを安めらせ参らせるは、ひとえに御孝行の至りにて候はんずれ、もし思し召し立たせ給ひて、令旨を下され給ふものならば、悦び馳せ参らんする源氏どもこそ、国々に多く候へ」と申し上げた。宮は即座には心を決められかねたが、相少納言といふ人相見が、「位に即かせ給ふべき御相まします」という。

頼政のすゝめもあり、令旨伝達の使者を東国へ下され、また、美濃尾張の源氏にも触れ、五月十日伊豆の北条蛭ヶ小島に着き、流人の前右衛佐殿にも伝えた。また木曾の義仲へもと中仙道に赴むかせた。
こゝに熊野の別当堪増は平家の重恩を受けていたが、どこからかこのことを聞いた。

さて同月十三日、宗盛は清盛に法皇のことをたびたび申ししたので、法皇を都の八条烏丸美福院の御所へ御幸を仰いだ。こうしているところへ熊野の別当堪増から飛脚で高倉宮が謀反を企てて軍を起こすことを知らせてきた。清盛はひどく怒り「高倉宮を土佐へ流せ」と三条大納言実房や源大夫判官らに命じた。この源大夫判官は三位入道源頼行の三男であることは、頼政が謀反をすゝめた事をまだ知らないのである。

五月十五日高倉宮へ頼政から「宮さまの御謀反は、もはや、事あらわれました。急ぎ三井寺へ入らせおわしませ」と連絡があつた。翌

十六日、高倉宮が謀反を起こされて、三井寺へ行かせ給うたと、
噂が伝わるや、都じゅうの騒動はひと通りでなかつた。同じ十六日
の夜、頼政も三井寺に入った。

三井寺では法螺貝はらがいを吹きならし、寺内の僧侶大衆を集め評議し、觀山くわいざんと奈良へ回状を送つた。^{*}山門は心変わりした。奈良興福寺はまだ来ない。ぐずついていると悪い結果になると、六波羅ろくぱらへ攻討しようとしたが、六波羅には軍兵數万騎がはせ参じていたので、二十三日明け方奈良へ落ちようとした。

謡曲では「頼政」のサシ、クセで「そもそも治承の夏の頃、よしなぎ御謀反を勧め申し、名も高倉の宮じしゃうのうち、雲井の外に有明の月の都を忍び出で、浮き時しもに近江路や、三井寺さして落ちたまふ。去る程に、平家は時を廻らさず、数万騎の兵を、関の東に遣おとわすと、聞くや音羽の山繞く、山科の里近き、木幡の関を外に見て、ここぞ浮き世の旅ごよみろ、宇治の川橋うら渡り、大和路おほなみさして急ぎしに】

*觀山のこと

というところです。

【寺と宇治との間に、関路の駒の隙もなく、宮は六度まで御落馬にて、煩はせ給ひけり、これは前の夜御寝ならざる故なりとて、平等院にして、しばらく御座を構へつゝ、宇治橋の中の間、引き離し下は川波、上に立つも、共に白旗をなびかして寄する敵を待ち居たり】と謡ふが、平家物語でも、その通り書いてある。

「去る程に、宮は宇治と寺の間にて、六度まで御落馬ありけり。これは去んぬる夜御寝ならざる故なりとて、宇治橋三間引きはなし」とあります。六波羅は知盛を大将軍にして、二万八千余騎木幡山うち越えて、宇治の橋にぞ押し寄せたる。

さてシテの語で【さるほどに源平の兵、宇治川の南北の岸にうち臨み、関の声矢叫びの音、波にたぐへて夥し、橋の行桁を隔てゝ戰う味方には筒井の淨妙、米法師、敵味方の目を驚かす】のくだりは、筒井の淨妙、秀は黒革緘の鎧を着て五枚兜の緒をしめ、黒塗りの太

刀を佩き、二十四さしたる黒母衣の矢を負い、塗籠藤の弓に好みの

ぬりごとどう

※矢を二十四本
持つこと

白柄の大長刀をとつて、ただ一人、橋の上を進んだ。橋の行柵を一

条二条の大路を走るごとく渡り、大長刀をふるつた。また、一来法師といふ大力の剛の者が、淨妙のうしろに続いて戦つたが、橋柵は狭い、淨妙をおしのけて前へ出て戦つた。一来法師は討ち死にした。

下野の国の住人、足利又太郎忠綱は「ただいまこの渡りを渡らざれば、長く弓矢の名折れるべし、よし水に溺れて死なば死ね、いざ渡らん」と真っ先かけて馬を乗り入れた。そして大音声にて「弱い

馬は下手に立てよ、強い馬を上手になせ。馬足のとどく間は、手綱をゆるめて歩ませよ、馬はずまば、手綱をかきくつて泳がせよ、水に流さるものは弓の弭に取つかせ、手に手を組み、肩をならべて渡れ。馬の頭沈まば、引き揚げよ、さりとて引き過ぎてかぶるな。鞍

蓋によく乗り、しつかと鎧を踏め、水のとどこおりしときは、三頭の上に乗り掛けられ、川中で弓を引くな、敵が射ても応ずるな、つね

に鐵を傾けておれ、真つ直ぐに渡つて押し流されるな」と三百余騎の軍兵が一騎も流されず、向こう岸へさつと渡り上がった。

謡曲では【さすが難所の大川なれば、左右なう渡すべき様もなかつし處に、田原の又太郎忠綱と名のつて、宇治川の先陣我れなりと名のりもあへず三百余騎、くつばみ揃へ川水に、少しもためらはず、群れいる群鳥の翼を竝ぶる羽音もかくやと、白波にざつざつとうち入れて、浮きぬ沈みぬ渡しけり、忠綱、兵を下知していわく、水の逆巻くところをば、岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てゝ、強きに水を防がせよ、流れん武者には弓箭を取らせ、互いに力を合はすべしと、ただ一人の下知によつて、さばかりの大川なれども一騎も流れず此方の岸に喚めいて上がれば味方の勢は、踏もためず、半町ばかり、覚えず退つて切先をそろへ此所を最期と戦うたり】と謡っています。後シテので【伊勢武者は、みな緋纈の鎧著て、宇治の綱代に、がゝりけるかな】と謡うのは、伊賀、伊勢の両国の官兵

は馬筏に押し破られて、六百余騎が流された。萌黃、緋纈、赤纈、いろいろの鎧が浮き沈みつゆられゆくさまは、神南備山の紅葉葉の、峰の嵐に吹き誘われて、竜田川の秋の暮れ、堰につかえて流れはてぬに異ならず。その中に緋纈の鎧を着た武者三人、網代にかゝつて浮き沈みながらゆられているのを見て、伊豆守仲綱が先の歌を詠みました。頼政は、左の膝頭を射られて重傷を負いました。兄弟の、伊豆守仲綱も次男源大夫兼綱も討死にし、自害しようと「埋木の、花咲くこともなかりしに、身のなるはてぞかなしき」と読み、自害しました。富も一本の矢に当たり、ご落命されました。

鶴

(平家物語の「ぬえ」という字は鶴と言う字ですが、

J I S 水準漢字にはありません)

源三位頼政は摂津守頼光の五代目、三河守頼綱の孫、兵庫頭仲政の子です。およそ三十年前にあたる近衛天皇時代の仁平の頃、主上夜ごとに怯えられることがあつた。大法、秘法といった修法を行なわれたがその効果がない。主上のお悩みは丑の剣こくのつるぎ、東三条の方角から一むらの黒雲が御殿の屋根に覆い被ると、主上の怯えが始まる。

むかし畠川天皇の時代、同じく天皇が夜な夜な怯えられることがあつた。時の将軍源の義家は、紫宸殿ししんでんの広縁ひろのべに祇候しきして、御悩おのうの刻限こくげんがくると、弓の弦を三度ひき鳴らし、大音声をあげて「前陸奥守源義家」と呼ばわると、人々はその声に身の毛の総立つ感じがしたが主上のお悩みもやんだ。このような先例にならい、武士に命じて警護されることになり、頼政がえらばれた。

謡曲には【これは近衛の院の御宇に、頼政が矢先にかかり、命を失

ひし鶴と申しゝ者の亡心にて候。その時の有様くわしく語つて聞かせ申し候べし。【そして】さても近衛の院のご在位のとき、仁平の頃ほひ、主上夜な夜な御惱あり、有驗の高僧貴僧に仰せて、大法を修せられけれども、そのしるし更になし、御惱は丑の刻ばかりにてありけるが、東三条の森の方より、黒雲一むら立ち来て、御殿の上に蔽へば必ず怯え給ひけり、すなわち公郷僉議（ワサニギ）あつて、定めて変化の者なるべし、武士に仰せて警固あるべしとて、源平両家の兵を選せられる程に、頼政を選び出されたり、頼政はその時は、兵庫の頭とぞ申しける、頼みたる郎等には、猪の早太、唯一人召し具したがり、我が身は二重の狩衣に山鳥の尾にて矧いだりける、尖矢二筋滋藤の弓に取り添へて、御殿の大床に祇候して、御惱の刻限を今や今やと待ち居たり、さる程に案の如く、黒雲一むら立ち来たり、御殿の上に蔽ひたり、頼政きっと見上ぐれば、雲中に、怪しき者の姿あり、矢取つて打ち番ひ、南無八幡大菩薩と心中に祈念して、ひつ引

※滋藤の弓
（しげとう）
弓の柄に藤を巻いたも

きひやうと放つ矢に、手応へしてはたと当たる、得たりやおうと矢
叫びして、落つるところを猪の早太、つゝと寄りて続けさまに、九
刀ぞ刺したりける、さて火を灯しよく見れば、頭は猿、尾は蛇、足
手は虎の如くにて、鳴く声鶴に、似たりけり、恐ろしなんども疎か
なる形なりけり】又【その時主上御感あつて、獅子丸といふ御劍を
頼政に下されけるを宇治の大巨給はりて、階を下り給ふに折節、郭
公訪れければ、取りあへず。一ほととぎす、名をも雲居に、揚ぐる
なか】……頼政右の膝をついて一弓張月の、いるにまかせて】
と謙遜の意をあらはした。みな頼政の歌道にも優れているのに感心
した。鶴は【うつお舟に、押しいれられて、淀川の、淀みつ流れつ
行く末の】とあるように丸木舟に入れて流したとあります。謡曲は、
ほとんど平家物語の通りである。この物語は、近衛天皇の仁平(115
年)の頃であるが応保(1191年)二条天皇御在位のとき、空鶴(ともづる)と
いう怪鳥の皇居における啼き声がしばしば主上を悩ますことがあつ

※ほととぎす

た。先例によつて、頼政をお召しになつた。宵のうちに一声啼いたきり、後は声を立てない。闇夜であるし、姿かたちも見えない、どこを目當てに狙いをつけてよいか見当がつかない。頼政は策をめぐらせ、まず大鎗矢※かぢらやを内裏の屋上へはなつた。鷦は鎗矢の音におどろいて空に飛び立ち、しばらくの間、声低く啼きさわぐ、それを目標に二の矢をとつてつがい、ひゅうとばかりきつて放せばふつと手応えして、鷦は落ちてきた。という話ものつています。

※矢が飛ぶと大きなうなりたてゝ飛ぶり矢を大

なぜ平家物語に鷲、威陽宮が出てくるのかと不思議に思った。よく読むと、治承四年九月二日相模の国大庭三郎景親より早馬で頼朝が北条時政と兵を上げ、石橋山にたてこもつたが、景親が攻め、舟にて安房上総へ逃れましたと言う注進があった。清盛の怒りはひとつおりでなく「頼朝は、さんぬる平治元年十二月、父義朝が謀反なしに死罪に行こなうべきを、故池禪尼(いけのぜんに)がたつての命を請うたるにより、死罪に行こなうべきを、故池禪尼(いけのぜんに)がたつての命を請うたるによつて、流罪となしたるものである。その恩を忘れ弓をひくは、必ず天罰をこうむるであろう」また平家の中には頼朝は、威陽宮の燕の太子の天も許さぬ計画と同じだから、燕の太子と同じ運命に落ちるであろうと云つたことによるのだろう。

我国の朝敵は、神武天皇の御代に紀州名草郡高雄村に土蜘蛛(つちぐもの)がいた、官軍がさし向かって勅旨を申し伝えて殺した。それ以来朝威を滅ぼそうとした輩は、大石の山丸、大山王子、守谷の大臣、山田の石川、

威陽宮
(かへようきやう)
次の項で
である

曾我の入鹿、大友の貞鳥、……平の将門、藤原頼長、藤原信頼にいたるまでに十余人にのぼるが、一人として本懐を遂げたるものはない。

君の威光は絶対であると言う考え方から「鷺」や「咸陽宮」の話が出てきたのではないかと推定します。平家物語「朝敵揃へ」にこの鷺が出てきます。

延喜年間の話であるが、醍醐天皇が神泉苑じんせんあんにお出になられたとき、池の辺に鷺がおるのを見らけると、六位の藏人に「あの鷺をとつてしまいれ」と仰せられた。飛ぶ鳥をどうして捕えることができようと思つたが、鷺に近づくと、鷺は羽ばたきしてまさに飛び立とうとする「宣旨じや」と六位が叫ぶと、鷺は地にすくみ伏して飛び立たない。御前へ持つてくると「朕の意にしたがつて參つたのは鳥ながら神妙の至りいたりである。五位にいたせ」と仰せられて、又、「今後は鷺の王たるべし」と記され首にかけてお放しになされた。実は、たゞ

王威のほどをおためしなされようととのためであつた。

謡曲では【覗いよりて岩間の陰より取らんとすれば、この驚驚^{ねる}羽風を立てゝばつと上がれば力なく、手を空しうして、仰ぎつゝ走り行きて、汝よ聞け、勅詫^{しめ}ぞと呼ばはり掛くれば、この驚立ち帰つて本の方に飛び下り、羽を垂れ地に伏せば、抱き取り觀覽^{かはん}に入れ、げに忝き王威の恵み、ありがたや頼もしやと、皆人感じけり、……御感の餘り爵^{しゃく}を賜り、共になさるゝ五位の驚、さも嬉しげに立ち舞ふや…】とまず同じことを謡つてゐる。

咸陽宮

支那の春秋戦国の頃、燕の皇太子の丹と言う者が、秦の始皇帝に捕われ、監禁されること十二年、丹太子が涙を流し「我故郷に老母あり、暇を賜り、今一度かれをみん」とぞ歎きけり、始皇あざ笑つて「汝に暇賜はんこと、馬に角生ひ、鳥の頭の白くならんを待つべき

なり」とぞ宣ひける。燕丹、天仰ぎ地に伏して「願はくは、馬に角生い鳥の頭白くなしてたべ、今一度母をみん」と祈りける。

※

三宝孝行の志を憐れみ給ふ事なれば、馬に角生ひて宮中に來たり、

※

鳥の頭白くなり庭前の木に住めりけり。始皇帝鳥頭馬角の変に驚き、

※

綸言返らざることを信じ、丹を許し本国へ返しけり。なほ悔しみて、

※

秦と燕の国境に、楚国といふ国あり。大きなる川流がれたり、か

※

の橋に渡せる橋を踏まば落つるやうにしたゝめて渡されたりければ、

※

真中にて落ち入りぬ。されども水にはちつとも溺れず、平地を行く

※

が如くにて、向かひの岸にぞ着きにける。これは亀が幾らと言ひ數

※

知らず水の上に浮かび来て、甲を並べて通しける。丹なほ恨みを含

※

んで、始皇帝に隨はず。始皇、官軍を遣はして燕を滅さんとす。

※

燕丹は大いに恐れて、荊軻けいかくという勇士を招き大将にした。樊於期はんおきと

※

いう者、始皇に父、伯父、兄弟を殺されて燕の国に逃げていた。始

※

皇は「樊於期の首を刎はねて差し出したものに賞金五百斤を与える」

※

佛教で三つの

※天子の言葉

と布告していた。荊軻は樊於期のもとへゆき「我聞く、汝が頭五百斤の金に報せられたんなり。汝頭を我に借せ。とつて始皇帝に奉らん。悦びて觀覽よろこびてくわんを経られんとき、剣を抜いて胸を刺さんは易かりなん」というと樊於期は「始皇帝をうつことができるなら、やさしいことです」とみずから首を切って死にました。また、秦舞陽しんぶようという剛の者を道案内として秦の都へいった。

ここ迄が謡曲の「咸陽宮」の前提の話であります。謡曲に「そもそもこの咸陽宮と申すは、都の周り一万八千三百余里、内裏は地より三里高く、雲くもを凌しのぎて築き上げて、鉄の築地方四十里、または高さも百余丈、雲路を渡る雁かりがねも、雁門かりもんなくては過ぎ難し、内に三十六宮あり、真珠の砂瑠璃まさるりの砂黄金の砂を地に敷き、帝の御殿は阿房宮、銅の柱三十六丈東西九町、南北五町」と咸陽宮の大きさ、豪壯さを謡っている。これは平家物語と全く同じで、その後も終わりまで同じです。簡単に書きますが、荊軻と秦舞陽の二人は、秦の都へ

※天子が御覽ごらんになる

やつてきます。そして燕の地図と樊於期の首を持参したと申し上げると、始皇は臣下に受取らせようとしたが「直々でないと渡せません」と断わると、それではと公式の儀礼で引見された。宮殿のさかんな威容に、秦舞陽は氣後れして震えた。^{しんぶよう}皇帝の前に燕の地図と樊於期の首のはいった櫃を御覽にいれた。櫃の底に氷のような劍が隠されている。始皇はそれに気付き逃げようとした。^{ひき}荊軻はその袖をつかまへ、櫃のなかの劍をとり始皇の胸に突きに当てた。始皇は三千人の后を持つていて、その中に花陽夫人という琴の名人がいた、その琴を聞きたいから少し暇をくれと言うので、琴を聞く、この所を謡曲では『花の春の琴曲は、和風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は同じ曲のさえずり、月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風、雲居に渡れる雁がね、琴柱に落つる声々も涙の露の玉簾、たまさかに人はよも白糸の、調めを改めて君聞けや、七尺の屏風は躍らば越えつべし、羅縠の袂をもひけばなどか、切れざらん、謀臣は有無に醉えり、群臣な

聖人の御助けとおしかえし、二三返の琴の音を君は聞こし召さるれども、荆軻は聞き知らずたゞ緩々と侵されて、眠れるが如くなり」と荆軻の心を緩んだ始皇は妃の引いた「七尺の屏風は躍らば越えつべしの意を悟られ、袖を引きちぎって柱の陰に身を隠した。荆軻も秦舞陽も討たれた。たゞ謡の最後は【秦の御代万歳^{ばんせい}を保ち給ふ事】、たゞこれ後の琴の秘曲、ありがたかりける例かな】と終わっているが平家物語は「やがて軍を遣わして、燕丹を亡ぼさる、蒼天許し給はねば……君に弓をひけば頼朝も同じようになるだろう」という人があつたと結んでいる。

小 横

高倉天皇は、建礼門院の御所につとめていた女房の召使の少女を、お目にかけられたが、世上の謗を憚られて少女を召されなくなつた。そのためとかく御思案にしづみがちで、寝殿にばかり籠もつておられた。時の關白、藤原基房（とよとも）は「女子の身分を問題にされることはありません。何の不都合が御在ましよう、すぐにもこの基房の養女に致し、早速お召しになるが宜しかろう」と申し上げが、御承知されなかつた。その少女は顔をあからめて「なんとなく氣分のわるような心地がいたします」といつて里の家に帰り、五、六日寝たばかりでとうとう果敢（はか）なくなつてしまつた。

主上は恋慕の思ひに深くしづんでおられた。お慰め申そとと建礼門院より小督殿（しげのりさま）という女房を差し上げた。小督は桜町中納言成範（しげのりさま）郷の娘で、宮中一の美人であるし、琴が上手であった。冷泉大納言隆房郷がまだ少将だった頃である。見始めたのが小督である。思ひにた

へ馬を歩ませた。龜山あたりの近く、ひとむらの松の立っているか
たから、かすかに琴の音がきこえた。馬ととめてこれを聞くと、夫
を思うて恋う想夫恋の曲であつた。腰より横笛を抜き、一声吹きな
らして、門の扉をほとほと叩き「御所より仲国がお使いに参りま
した」というと、戸を細めにあけ、小女房が「現なやかゝる賤き賤
が家に、何の宣旨の候べき、門達へにてましますか」とことわる。

【門閉ざされでは叶ふをまじと】と門を押しあけ中にはいた。「御
書を賜つて参りました」と御文を差し出す、小督が見ると正しく主
上の親書である。すぐに返事をしたためて、女房の装束ひとつ重ねを
仲国へ引出物とした。そして「入道相国殿が恐ろしことを言われる
と聞き、情けさにここへ来ました。このような住まいですから琴を
弾いたことはありません。明日は大原の奥へ参ろうと思ひ勧められ
るまゝに琴を弾きましたむと」はげしく泣き出された。

仲国は馬を走らせ内裏へ帰ると、主上はまだ御座所に起きておられ

た。主上は「今夜すぐに連れて参れ」と仰せられる。

謡曲では【迎への舟車の、やがてこそ参らめと】とそれとなく迎へが来ることを匂わせていいだけである。酒宴をして、仲国は舞いを舞い、小督に見送られて都へ帰つて行く所までである。

謡曲はさすがに、劇的に作られてある。

仲国は清盛に知られると恐ろしかつたが、嵯峨へ迎えに行き、内裏へ連れて帰り人目につかぬ場所に忍ばせた。主上は夜ごとにお側へ召されている間に姫君がひとりお生まれになつた。坊門の宮範子内親王である。清盛はこれを知り、小督をとらへ、尼にして釈放した。

木曾田

謡曲では木曾義仲のことは、「木曾」という曲にあります。これは義仲が両道を討ち従えて、都へ上る途中、植生に陣を取つた、そこに植生八幡宮があり、八幡大菩薩は応神天皇の化身であられますゆえ願書を奉納し、明日の合戦の勝利を祈願しようと、かくもい覺明に願書を書かせ、奉納し、翌日の俱梨迦羅くりからの戦いに大勝利を得たと言う曲ですが、この中の「願書」のところが難しいとされています。

さて寿永二年三月上旬、兵衛佐頼朝と木曾冠者義仲との間に確執あり、そのため頼朝は軍勢十万余騎を率いて、信濃の国へ出発した。

木曾義仲はこれを聞くと軍勢三千余騎で依田城よりたを出て、信濃と越後の境にある熊坂山に布陣した。義仲は今井四郎兼平を使着として頼朝のもとへつかわし、「そもそも御辺は関八州を討ち従え、東海道より攻め上り、平家を追い落とさんとし給ふ、この義仲も、東山、北陸両道を討ち従え一日たりとも先に平家を滅ぼそうとしておるに、

※甲斐武田信光の讒言による

いかなる子細あつて義仲を討とうとされるか、御辺と仲連いして平家の笑い者になろうなどとは思ひもよらぬ」と言わせたが、頼朝は「まさしく頼朝を討たんとする謀反の企でありと告げ知らせる者がある。ここで手を引くわけには行かぬ」と答へ返してきた。

義仲はやむなく、嫡子の義重といふ今年十一才になつた小冠者に、一騎当千の武士をつけて送り、他意のないことを示した。頼朝もそれで疑いも解け、この子を我が子と致そうと鎌倉へ帰つた。

木曾義仲は遠く信濃の国にあり、越前に火打ひうちが城を作らせ兵六千余騎で守らせた。この城は堅固な城であつたが、平家に返り忠するものがあり落ちた。平宗盛をはじめ平家一門大いに喜び、維盛、通盛忠度ら十万余騎を礪波山となみやまへ向かわせた。謠では「さても平家は越前の城さともが城を攻め落とし都合その勢十万余騎礪波山まで押し寄せる」と謠つてゐる。義仲は五万余騎を率いて礪波山にはせ向かつた。

義仲は「味方は僅か五万余騎、計略を以て防せがんとて、白旗數多

調へつゝ黒坂の上に押し立てゝ、敵の心を疑わしめ、山中に屯させ夜に入り大手搦手より一度にかかり、俱梨迦羅が谷へ敵を落とさんと】植生に陣した。そこで義仲は「これより北に当たつて夏山の茂みの中に、朱の玉垣ほの見えて、方削造りの社あり、如何なる神を崇め奉りたるぞ、義仲何となう陣取りしに、八幡の御地なるこそ吉兆なれ」と、学僧の太夫房覺明に願書を書かせ奉納した。

詔の願書と、ほど同じではあるが少し違うところもあるので書きます。「帰命頂礼」、八幡大菩薩は、日域朝廷の本主、累世明君の異祖たり、宝祚を守らんが為、蒼生を利せんが為に、三身の金容を顯し、三所の權扉を押し開き給へり。こゝに頻年よりこの方、平相國と云う者あり。四海を管領し万民を悩亂せしむ、これすでに仏法の怨、王法の敵なり、義仲いやしくも弓馬の家に生まれて、わづかに箕裘の塵を繼ぐ、かの暴惡を察するに、思慮を顧みるに能はず、運を天道に任せて、身を國家に投ぐ、試に義兵を起こして凶器を退けんと

【帰命頂礼】頭を足につけてお祈じします。八幡大菩薩は心に天帝の化身であられますゆえ、我が朝の本主であります。大つは緋御の御位を守り蒼生を救ひたため、弥陀三尊の姿を現わし三所の權扉となられました。近年平相國が、天下を一手に支配し万民を悩ましてしまず、まさしく仏法の仇であり王の敵であります。私は弓馬の家に生まれ及ばずながら父祖の業を継ぎました。清盛の暴惡を憚うと、身の分別にはかり云つてはわれません、運を天にまかせ、身命を國家の命にまげうと

欲す、しかるに鬪戦両家陣を合わすといへども、上卒未だ一致の勇を得ざる間、まちまちの心を恐れたるところに、今一陣に旗を挙ぐ、戰場にして忽ちに三所和光の社壇を拝す、機感の純熟明かなり、因徒誅戮疑なし、歎喜涙こぼれて、渴仰肝に染む、なかんづく祖祖父前陸奥守義家の朝臣、身を宗廟の氏族に帰附して、名を太郎義家と号せしよりこの方、その門葉たるもの、帰敬せずと云うことなし、義仲その後胤として、頭を傾けて年久し、今この大功を起こす事、譬へば嬰児の貝を以て巨海を測り、蟻蟻が斧を懶らかいて、隆車に向ふが如し、しかりといへども、國の為、君の為にして此を起す、全く身の為、家の為にしてこれを起こさず、志の至り神感空にあり頼もしときかな、當ばしきかな、伏して願はくは、眞顯威を加へ、盡神力を合わせて、勝つ事を一時に決し、仇を四方へ退け給へ、然れば即ち丹折眞慮に叶ひ、玄鑑加護をなすべくば、まず一つの瑞相を見せしめ給へ、

寿永二年五月十一日 源義仲敬つて白す」このよ

此しに兵を整へ、國政を討とうとしてまいすしかし、ここに平家の軍勢と对沖しなが前の大將がもう「つ上りません将兵の心のまもらであるのを恐れてしましたところ敵の櫓にのみ八幡三所神の御社をはしまることができました、神への感應成就はあきらかで、追賊を滅ぼすことは疑いありません、出びのあまり涙がこぼれ、神功の有難さは肝に銘にます、ことに祖父の源義家が一族の氏神と仰ぎ、自らから入幟太郎と名のつて以来、門に出入なるもので、仰げない者はありません、この義仲もその後胤として牛久く敬仰しています。今私が大事を起こす時はたゞへば、水子が目で人海の水を覗り、かききりがその縁を振り上げて大きな中に立ち向かうようなものであります。私の至誠は神もご存じです。おことにたのもしく、喜ばしい限りです、神の威と靈験をもまして、敵をもし私の心のいのりが神靈にかない加護を賜りますならば先づよきをおしめしと

きし。源義仲敬つて白す

うにしたため終わると、義仲は二筋の矢を添えて神殿に奉納した。

すると雲の中から山鳩三羽が飛んできて、白旗の上に舞い翔つた。

【さてこそ平家の多勢を俱利伽羅が谷に追落し】とあるが、源氏

は、日暮れまで時をかせぎ、夜になつて平家の大軍を俱利伽羅谷へ追い落とそうと計つた。平家はそれとも知らず、いたずらに日を暮らした。とかくするうち、搦め手へ回つた源氏の一万余騎は俱利伽羅の堂のあたりで、どつと鬨の声を上げた、振り返つてみると白旗が雲のように上がつてゐる。そのうちに大手から木曾勢一万余騎が関の声を合わせ、さらに礪波山の麓に隠しておいた一万余騎、今井四郎の勢と前後四万余騎がわめき上げた声は山も川も一度に崩れるかと思うばかりであった。闇は次第に濃ゆくなる、前後から敵は攻めてくる、一度くずれ立つとこれを立て直すことは容易でない、我には馬がおち重なり、おち重なり、平家の軍勢で生め尽くされた。

※謡曲乱曲
「俱利伽羅落」

さる極に夜に入れば、敵に大勢と見えん爲に千頭の牛を集めめて皆角の先に火を貼し追つ払い給へば、光虚空に元も満ちて、五月闇、おぼつかなくも暗き夜も暗からぬ風を集むれば敵大勢と心得、左右ならう騒り傳ぎりしき、今井の四郎六千余騎大手より開を作れば彼の林の五万余騎、一度に聞せ、どつと合わすれば、敵取る物も取りあへ俱利伽羅が谷にばつと落つ、馬には人には馬、薄も重なり薄も重り、七万余騎は俱利伽羅が、谷の深きをも、浅くなる檻垣めたりけり。

その為、この谷の辺には、矢の穴や刀の傷跡が今でも残つていると聞くとあります。

謡曲では、俱利伽羅の戦いは、曲の最後に【さてこそ平家の大勢を、
俱利伽羅が谷に追い落とし、勝利を得しも實に八幡の神力なり】と
結んでいる。

實 盛 (みねよしよしよん)

謡曲の「実盛」は、遊行上人が説法しておられると一人の老翁が毎日聴聞に来る。実は実盛の幽靈である。そして後半に甲冑姿の実盛が現われ、篠原の合戦の様子を詳しく語るのであるが、謡曲では篠原の合戦が主体である。平家物語によると、石橋山の合戦のとき、頼朝に矢を向けた武士達は、みな都へ逃げ上り平家方についた。これ等のものは、次の戦のあるまで連日集まつて、宿所で酒宴をしていた。実盛の所へ集まつたとき実盛が「つらつら當世の有様を見

るに、源氏の方はますます強く、平家はどうも旗色が悪い、おのれの方、木曾殿の方へ参らうではないか」と云うと一同「げにも」と同意した。また翌日「さても、昨日実盛が申したことは、どう思われるぞ」と尋ねると、侯野五郎という者が「我等は東国にて人に知られた者、旗色を見てあちらこちらへと、寝返っては見苦しい、おのの方はいざ知らず、この景久はあくまで平家の味方して討ち死にする覚悟だ」と云つた。実盛は「実はおのの方の氣を引いてみようと思つて云つたことだ、実盛も今度の北国で討ち死にしようと覚悟をきめた」と改めて真意を明かした。しかもその約にたがえず、その座にあつた二十余人が残らず、北国で討ち死にしたのは哀れである。

さて平家は加賀国の篠原に退き人馬を休ませていた。寿永五年五月二十日に、木曾勢五万余騎が押し寄せた。

武藏の国の住人長井斉藤別当実盛は味方の軍勢が総崩れになつた中

でただ一騎、引き返し引き返しては、防ぎ戦った。かねて覚悟を決

めていたので、赤地の錦の直垂に、萌黄緘の鎧着て、鍔形打つたる

青の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、二十四本差したきりふの矢

を負い滋簾の弓を持ち、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍をおいてまたがつ

ていた。木曾殿の方から手塚の太郎光盛が進み出て、声をかけた。

「殊勝なり。いかなるお方なれば、味方の勢はみな落ち行きたるに、

ただ一騎踏み止まつて戦わるるとは、さてもゆかしきお心ばえと見

えたり、名乗らせ給え」

「そういうわどのはたれぞ、なんと申さるる」

「信濃の国^の住人手塚太郎金刺光盛」

「さては、たがいによき敵なり、和殿を見下げるのではないが、存
する旨あつて、名は名乗らぬ」

と斎藤別当が馬を押しならべた。手塚の郎党は、主人を討たせじと、

斎藤別当とおし並べて、むんずと組みついた。

※下の方ほど色

を薄くぼかし

た緘

※葦毛に灰色の

斑点の交じつ

た色の馬

※弓の柄の部分

を藤で巻く弓

「おのれは日本一の剛の者と組み打ちする氣か」

と胸ぐらをとつて引き寄せ、鞍の前輪に押しつけ身動きもさせず首かき切つて捨てた。手塚の太郎は、左手に馬を回し、実盛の鎧の草摺りをまくりあげて、二太刀刺し、弱つたところに組みついて、ともどもに馬よりどうと落ちた。戦いに疲れ、手傷を負い、その上老武者である。ついに手塚のため組みしれ、首を落とされた。

「光盛は、奇異の曲者を討ち取つて参りました。侍かと見れば錦の直垂を着ております。また、大将かと見れば、続く軍勢がおりません。名乗れや名乗れと責めましたが、遂に名乗りませぬ。言葉は関東なまりでした」このあたりは、謡曲のシテの語りと同じです。

木曾殿は「おお、それは、斎藤別当でないか、しかしそれなら、白髪のはずだ、ひんじけ鬢髪の黒いのは解せぬ。樋口次郎は見知つて居ろう、樋口を呼べ」

樋口は一目見るなり、

「あないたましや、齊藤別當にて候」と涙を流した。

「それならばはや、七十才をこえ、鬢髪の黒いのはなぜか」と尋ねると、樋口次郎は涙をおさへながら、

「齊藤別當が、つねづね『六十すぎて戦場へ向かうときは、おもて髪や鬚を黒く染めて、若がえろうと思つてゐる。白髪頭を振り立てて若殿ばらと先駆けを争うも、あとなげなし、また、老武者と人に侮られるのも、口惜しい』と云つておりましたが、はたして染めて参りました。ためしに洗わせて御覽じませ」

木曾殿が、首を洗わせて見るとすっかり白髪になつた。

また、謡のクセに【また実盛が、錦の直垂を着ること】は、宗盛にいとまごいに参上したとき、

「この度、北国へまかり下りますうえは、さだめ生きてはかえりますまい。われはもと越前の住人。近年はご領を賜つて、武藏の長井に居住しておりました。事のたとへにも『故郷へは錦を着て帰れ』

とか。なにとぞ、錦の直垂の着用をお許し下さい』と申したので、内大臣も「けなげにも申したるかな」お許しになった。昔の朱買臣も、錦の袂を会稽山に翻し、今の実盛は、その勇名を北国に上げたとも云えよう。さる四月十七日、十万余騎で都をたつた平家の軍勢は、五月下旬に都へ帰ったときは、二万余騎であった。

謡曲の後半、とくにシテの語り以後はほとんど平家物語と同じです。前半については、謡曲の本の最初の解説に「時宗縁起」に『加州江沼郡篠原といふ砂原に、実盛が首洗之池とて大きなる池あり。その上を手塚山といふ。昔このところ実盛・光盛組討の場なり（中略）その後、相模國藤沢他阿弥上人巡國の節、このところを通られしに、実盛の魂魄出で、跡を弔ひ給へといひて見えず。上人感涙し、このところに七日逗留して別時の大念佛を始め給う』とあります。こうしたところがら作られたのでしょうか。

田・兼平（卷九 木曾の最後）

義仲は、寿永二年八月十日左馬頭に任せられた。朝日の将軍といふ院宣を下された。しかし我が高名顔に、官位の昇進を思うまゝに行なつたり、行儀作法も悪く、顰蹙ひんしゆくをかつたが義仲を恐れて、口にしなかつた。

平家は、讃岐の屋島にあり、山陽道八ヶ国、南街道六ヶ国を攻め取つた。義仲は直ちに討つ手を差し向けたが、備中の水島に破れた。

義仲はこれを聞き、一万騎を率いて備中の国万寿の庄で勢揃いし、屋島へ押し渡ろうとしているところへ、京都の留守に残しておいた樋口次郎兼光から「十郎藏人が院の御寵愛ちきゅうあいを得て、さまざまに讒奏ざんさうされておられます。西国の戦をしばらく差し置かれ、急ぎのばらせたまへ」と伝えてきたので、都へ馳せ帰った。

都には、源氏の軍勢が満ちあふれていた。いたるところで、人家に侵入して略奪りやくだつするものが多かつた。賀茂、八幡のご料地にさえ、見

※水島の戦
寿永二年四月

※顰蹙ひんしゆく
顔をしかめる

さからいなく押し入って、青田を刈って秣にする連中もいれば、人

の倉をこじあけて物を取る連中もいた。法皇から義仲へ「狼籍をし

づめよ」と仰せられた。義仲は都の守備をするものが、その辺にい

くらでもある田を刈らせ秣にし、兵糧米を調達したとて、別に異に

するに当たらぬ。宮々の御所や大臣の家に押し入ったわけでない」

とほざいた。法皇もようやく木曾討伐を思いたゝれる様になり、召

すべき武士もないまま、叡山と三井寺の僧どもを召され、公郷、殿

上人も軍勢を集めた。近江守源藏人仲兼、山本冠者義高等法住寺へ

籠もつたが、今井四郎兼平、樋口次郎兼光等に攻められ、斬られた

首を六条河原にかけならべられた。

義仲は家の子郎党を集め

「義仲は一天の君に向かい戦に勝った。わしは主上になつたものか、法皇になつたものか、法皇になろうと思うが坊主頭もおかしい、主上になると、童になるのはこまる。さらば閑白になろう」といった。

覚明がすすみ出て

「関白になるのは、藤原鎌足の末裔の藤原氏だけと決められていました。殿は源氏でいられますから、関白になれますまい」といった。

義仲の狼籍をしづめようとして頼朝は、弟の範頼、義経に六万余騎を率いさせて都へ上らせたが、もはや御所も内裏も焼き払われたことが伝わり、「今すぐ都へ上って、いくさすべきでない」として尾張の熱田の辺にとどまっていた。

義仲はこの情報を聞き、平家に使者を送り

「急ぎ上洛せられよ。一つになりて、関東へ馳せ下り、兵衛の佐を討伐せん」と申し入れた。何か今の世のどこかの国と似ているようだ。

寿永三年正月十一日義仲は院に参上して、平家討伐のため西国に出陣すべき由を奏上した。十三日出発と決められたが、東国より頼朝が、範頼、義経を差し上せた数万余騎がすでに美濃、伊勢の国に到

達したと言う情報が入り、義仲は直ちに、宇治瀬田の橋を引き外し、瀬田へ今井の四郎兼平の八百余騎、宇治へは五百余騎を差し向けて。佐々木高綱、梶原景季を先陣に、源氏は宇治川を一気に突破すると、義経はたちまち都へ入って法皇の御所をおさえた。法皇を取られた木曾は、もはや賊軍である。わずかな手勢を率いた義仲は、瀬田あたりを固めていた腹心の、今井四郎兼平を求めて、源氏の大軍を駆け破り駆け破り、駒をすすめた。今井もまた、義仲の身を案じて引き返す途中、ぱつたりと出合ひ、手を取りあって喜んだ。

さて義仲は、信濃から、巴、山吹という二人の美女を都まで連れてきていた。山吹は病のために、都に残してきた。巴は、色白く、髪長く、容貌が真に美しい。しかも屈強の荒馬乗りで、どんな難所でも乗り下りし、弓矢打物取っては、如何なる鬼神にも立ち向かおうと言う一騎当千の勇婦である。多くの者が討たれたが、巴は討たれもせず、最後の七騎のなかに残っていた。

謡曲の『巴』のクセでは『さても義仲の、信濃を出でさせ給ひしは五万余騎の御勢くつばみを並へ攻め上る、磯波山となみや俱利伽羅志保の合戦に於ても、分捕り功名のその数、誰に面を越され、誰におどる振舞の、なき世語り』と謡い、その後栗津ヶ原の合戦の様子を謡うことになる。

義仲と今井の周囲に散り散りになつていていたものが駆け集まりいつか三百余騎になつた。義仲は巴を呼んで「そなたは女だ、これより、いづくなりと落ちて行くがよい。われはここで討ち死にする覚悟だ、義仲は最後まで女を連れていたとあっては末代までの恥となる、とう去れ」と言われた。

しかし巴はなお離れがたく、「よき敵と出会い、木曾殿に最後の戦してお目にかけ別れたきもの」と、馬をとめて待つていると、そこへ、武藏の国の住人の御田八郎師重三十騎ばかりが現われた。その中へ割つて入り、御田八郎に押し並べ、むんずと組み、引き落とし

首かき斬った。そして鎧を脱ぎ捨て落ちていった。

さて『巴』の謡では『さてこの原の合戦にて、討たれたまひし義仲の、最後を語りおはしませ』で『頃は睦月の空なれば、雪はむら消えに残るをたゞ通路と汀をさして、駒をしるべに落ち給うが、薄氷の深田に駆込み弓手も馬手も、鎧は沈んで下り立たん頼りもなくて、手綱に組つて鞭を打てども、退く方も渚の浜なり前後を忘じて控へ給へりこは如何に浅ましや。かゝりし處にみづから駆け寄せて身奉れば、重手は負い給ひぬ、乗替に召させ参らせ、この松原に御供し、はや御自害候へ、巴も共と申せば、その時義仲の仰せには、汝は女なり、忍ふ便りもあるべし、これなる守り子袖を、木曾に届けよこの旨を、背かば主従三世の契り絶え果て、永く不興と宣へば巴はともかくも、涙に咽ぶばかりなり、かくて御前を立ち上がり見れば敵の大勢、あれは巴が女武者、余すな洩らすなど、敵手繁き懸れば、今は退くとも通るまじいで一戦嬉しやと、巴少しも驕が

すわざと敵を近くなさんと、長刀ひきそばめ、少し恐るゝ氣色なれば、敵は得たりと、切って懸かれば長刀柄長くおつ取り延べて、四方を払ふ八方払い、一所に当たるを木の葉がえし、嵐も落つるや花の滝波枕を置んで戦かひければ、皆一方に切り立てられて後も遙かに見えざりけり、後も遙かに見えざりけり、今はこれまでなりと、立ち返り我が君を、身たてまつれば傷わしや、はや御自害候ひて、この松が根に伏したまひ御枕のはどに御子袖、肌の守りを置き給ふを、巴泣く泣く賜りて、死骸に御暇申しつゝ、行けども悲しや行きやらぬ、君の名残りを如何にせん、とは思へどもくれぐれの、御遺言の悲しさに、栗津の、汀に立ち寄り、上帶きり、物具心静かに脱ぎ置き、梨打鳥帽子同じく、かしこに脱ぎ捨て、御小袖を引き被きそのきわまでの佩添の、小太刀を衣に引きかくし、所は此処ぞ近江なる信楽笠を木曾の里に、涙と巴はただ一人落ち行きし後ろめたさの執心を弔ひて賜び給え』と現わしている。

巴はその後、越後の国へ落ち、尼になつた。

『兼平』の曲では義仲、兼平の三百余騎は敵六千余騎の中へ駆け入った。群がる敵を駆け破り、駆け抜けし敵の後ろへ出たときは、今井とただ二人となっていた。

そこへまた新手の五十騎ほどが現われた。今井は義仲に「兼平はこの敵をしばらく防ぎ参らせる、君はあの松原へ入らせ給え」という。義仲は「多くの敵に後ろを見せて、ここ迄きたのは、ただそなと一と所で死なんが為であつた、一つ所で討ち死にしよう」というのを、兼平は「最期に不覚ふかくをいたさば、後世までも名に傷がのこります、ただ曲げてあの松原で静かに御自害下さい」という。

義仲もつともと栗津の松原へと駆けた。正月の二十一日、田には薄氷が張り詰め、何れが深田とも分からず、忽ち深田のなかに馬の足を踏み入れ、鎧よろいを踏ん張つても、鞭で打つ手も馬は動かず、そのときいづれともより放たれた矢が、義仲の兜の内に当たつた。痛手にたまらず馬よりどうと落ちた。そして石田の郎党二人が駆け寄り、

ついに義仲の首を上げた。そして首を太刀の先につらぬき、高々とさしあげて「木曾殿をば、三浦の石田為久討ち取つた」と名乗るの兼平の耳に入つた。

「今はたれをばかりわん。これ見たまえ、東国の大原、日本一の剛の者が自害の手本よ」と叫び、太刀の切つ先を口にふくみ、馬から真っ逆様に飛び落ちて死んだ。

謡曲『兼平』の後半、サシ、クセ以後は、ほとんど平家物語と同じである。兼平の最後のところは

『これぞ最後の広言と、鎧踏ん張り、大音あげ木曾殿の、御内に今井の四郎、兼平と、名乗りかけて、一騎当千の、秘術を現わし大勢栗津の、汀におつ詰めて磯打つなみの、まくり切り、蜘蛛手十文字に、打ち破り駆け通つて、その後、自害の手本よとて、太刀をくわへつゝ逆さまに落ちて貫かれ失せにけり、兼平が最後の仕儀目を驚かす有様なり』と謡つてゐる。

さて義経は木曾義仲を都より追討し、寿永三年正月二十九日、範頼
義経は参院して、平家追討のために西国へ発向すべき由を法皇に奏
上した。

西国に落ちた平家は、勢いを盛り返し、去年の冬頃から福原の旧都
に住み着き、一ノ谷をば西の城郭に構え、東の生田の森を大手の木
戸と定めた。

源氏のは大手の大将は範頼、搦手の大将は義経、大手は摂津の国昆
陽野（伊丹）に、搦手は丹波と播磨の境三草山の東に陣取りをまし
た。義経は軍を二手に分け、土肥次郎実平には、一ノ谷の西の木戸
口（明石の方面）へ、義経は一ノ谷の後ろ鶴越（ひよどりこえ）へ向かうこととします。

この鶴越の坂落としは有名な話である。

熊服（巻九 二度駆けのこと）

「籠」の曲に【さるほどに平家は去年播磨の室山、備中の水島二度の合戦にうち勝つて山陽道南海道合わせて十余ヶ国^の兵。十万余騎津の国一ノ谷に籠りける、東は生田の森、西は一ノ谷を限つて、それは赤旗いくらも立て竝べ、春風にたなびき天に翻る有様、猛火雲を焼くかと見えたりこの城の前は海後は山左は須磨、右は明石^{ひろせ}：味方の勢六万余騎を一手に分けて範頼義經の大手搦め手の海山かけて須磨の浦、四方を囲みて押し寄せる】と一ノ谷の平家の軍勢の勢と、寄せ手の源氏の軍勢の様を謡つて居ます。

籠の曲は源氏の梶原の源太景季の生田の合戦を謡つています。

この曲も修羅物（二番目物）であるから謡の終わりの方は合戦の有様を謡つてあります。しかしこの一ノ谷の合戦の様子は、なぜか負けた平家の武者の物語の曲が多いようです。「忠度」は平忠度が源氏方の岡部の六弥太^{ろくみつた}に討たれたことを、平敦盛が熊谷の直実に討た

れた『敷盛』『俊成敷盛』があります。忠度は和歌の道に長け

「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」と読んだ句は有名でこの曲にも出てきます。敷盛は笛の名手でした。

このように文武に長けた若武者の哀れさが能の幽玄ゆうげんを現わすのに合つたのかも知れません。

簞は源氏の武者梶原源太景季ですが、簞に梅の一枝を挿して笠印としたという優しさを謳っています。

まず、前半のシテの語りの中に『源氏の方に梶原平三景時、同じき源太景季、色殊なる梅花のありしを、一枝折つて簞に挿す、この花即ち笠印となりて』『簞の梅とは申すなり』とある。また、この曲のキリで『所は生田なり、時も昔の春の、梅の花さかりなり、一枝手折りて簞に挿せば、もとより雅びたる若武者に、相あふ若木の花豊かくれば簞の花も源太も我さきかけん、さきかけんとの、心の花も梅も、散りかゝって面白や』と謳っている。

平家物語で、梶原一族の戦い振りは、「梶原が五百余騎、生田の森の逆茂木を取り除けさせて、城の内へ喚いて駆く。次男平次あまりに先を駆れて進む間、父平三、平次討たすなものどもと、父の平三、兄の源太、同じき景家続いたり。堅様横様蜘蛛手十文字に駆け破つて、さつと引いて出でたれば、嫡子の源太は見えざりけり。返せやとまた取って返す。

このところを謡曲では「八騎が中に、とり籠めらるれば、兜も打ち落とされて、大童の姿となつて、郎党三騎に後ろを合わせ、向ふ者をば、拌みうち、また巡り逢へば車切り、蜘蛛手かく縄十文字、鶴翼飛行の秘術を尽くす」と謡う。梶原これを見て、急ぎ馬より飛んでおり、父子して敵を打ち、敵中から子を救い出してきた。

※兜をかぶらず
髪を散らす姿

忠^{ただ}度^{のり}、俊^し成^{なが}忠^{ただ}度^{のり}

謡曲では、この二曲とも修羅物である。『忠度』では、後半で一の谷の戦いで、岡部の六弥太に討たれる合戦の様子を謡っているし、『俊成忠度』では、修羅王を元の下界へ追つ下すという戦いの有様を謡っているためである。

しかし忠度は、何れの曲の前半にあるように、和歌の道に深く、三位俊成の郷に師事し、世に知られた若武者であった。寿永二年平家が都落ちしたとき、途中から引き返し俊成郷を尋ね、「この二三個年は、京の騒ぎ、国々の乱れ、あまつさへ平家の上にかかること、しかも主上もはや都を立ち退かれ、一門の運命はや尽き果てゝ候らへば、勅選の歌集のご沙汰承つて候ひしに、一首なりとも御選を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の乱れが出で、その沙汰なく候。この後世静まって選集の沙汰候はゞ、これに候ふ巻物の中に、一首なりとも御選をいたゞき、草葉の陰にても嬉しと存じ候はゞ」

と日頃詠みおいた中の、秀歌と思しき百余首の巻物を俊成郷に差し出した。三位はこれを聞いて見て「このような形見を下され決して粗末には扱いません、それにしても、このようなときわざわざお訪ね下され、風雅に対するお心、深く感じ申します」と涙をとどめかねる思いであった。後の世、勅選の千載集せんきゆうしゆが編まれるとき、あづかつた巻物のうち採用したい歌はいくつもあったが、朝敵となつた平家の方の人なので「故郷の花」という

さざなみや志賀の都はあれにしを

昔ながらの山桜かな

という歌を、一首だけ選び、読み人知らずとして勅撰集にのせた。

このところを『忠度』のサシで『さなぎだに妾執めうし多き婆婆ばばなるに、何なかなかの千載集の。歌の品に入りたれども、勅勘しめかんの身の悲しさは、読人知らずと書かれしこと、妾執の中の第一なり』と謡つてい
るし、また、『そもそも御白河の院の御宇に、千載集を撰はる、五

条の三位俊成の郷、承つてこれを撰す。年は寿永の秋の頃、都を出でし時なれば、さも忙がわしかりし身の、心の花か蘭菊の、狐川より引き返し、俊成の家に行き歌の望みを嘆きしに、望み足りぬれば』とも謡つてゐる。

『俊成忠度』には、やはり前シテで『さても千載集に、一首の歌を入れさせたまふ、御志は嬉しそれども、読人と知らずと書かれしこと、心にかゝり候』これに対してツレの俊成の郷は『もつともそれはさる事なれども、朝敵の御身を頭さんは世の憚りなり、よしやこの歌あるならば、御名は懼れよもあらじ、御心安く思し召せ』と答へてゐる。

忠度は、一ノ谷の戦いのとき、「旅宿の花」という題で行き暮れて木下蔭を宿とせば

花や今宵の主ならまし

といふ歌を、短冊に書き、簾に挿していた。これは二曲ともそのことを

説っている。

『忠度』では、キリで岡部の六弥太に討たれ、六弥太が『傷わしや
かの人の御死骸を見奉れば、その年もまだしき、長月頃の薄雲り、
降りみ降らざみさだめなき、時雨ぞ通う村紅葉の、錦の直垂はたゞ
世の常によもあらじ、いかさまこれは公達の、御中にこそあるらめ
と、御名ゆかしき処に、艤を見れば不思議やな、短冊を附られた
り、見れば旅宿の題をすえ』とある。

『俊成忠度』では、ワキは岡部の六弥太で俊成郷に和歌での值遇を得て
いる、この短冊を見せようと尋ねて行く、そして『只今参るご
と余の儀にあらず、西海の合戦に薩摩の守忠度を、某が手に懸け失
ひ申して候、御最後の後、尻籠を見候らへば、短冊の御座候』とツ
レの三位に見せる、『げにや弓馬の道ならねど、何時しか世に名を
残し置き給ふ事の哀れさよ、何々旅宿の花という題にて』と先の歌
を詠む。

さて忠度の一ノ谷での討死にの様子は、平家物語も謡曲も『忠度』も全く同じである。

『我おも船ふねに乗のらんとて、汀しおの方ほうにうち出しに、後うしろろを見れば、武藏むさしの國くにの住人すじんに、岡部おかべの六弥太ろくみた忠澄ただよしと名なのつて、六七騎ろくしきにて追おっ駆くけたり、これこそ望のぞむ所ところよと思おもひ、騎こしの手て綱つなを引ひつ返かせば、六弥太ろくみたやがてむむすと組くみ、両馬りょうばが間にどうと落ち、かの六弥太ろくみたを取とつて押おへすでに刀とに手てを掛けしに、六弥太ろくみたが郎わらわ等など、御後ごこうろより立ち回まわり、上うにまします忠度ただよしの、右の腕うでを打ち落おちおちとせば、左の御手ごてにて六弥太ろくみたを取とつて投なげ掛け、今は敵へだはじと思おもしめして、其處そのところ退しりぞき給たまへ人々ひとびとよ、西にし拝いたまんと宣いだひて、十方世界じゆうがくさい念佛ねぶつ衆生じゆうじやう攝せき取とり不ふ捨しとのたまひし、御声ごゑの下したよりも、傷いたわしやあへなくも、六弥太ろくみた刀とを抜ぬきもち遂ついに御首ごしゅを打ち落おちおちとす』と討死の様子を謡うたつてゐる。そして簾れんを見ると短冊たんばくに旅宿りゆしゆの花はなと題あとつけた、先の歌うたが書かかれていた。

敦盛・生田敦盛（巻九 敦盛最後のこと）

敦盛の曲も一ノ谷の戦いで、曲のキリで敦盛が熊谷次郎直実と戦い、討たれるさまを謡った曲で修羅物です。

生田敦盛も修羅物ですが、「通盛」とこの曲は修羅物でも、他の修羅物と趣がすこし異なります。

さて一ノ谷の戦いは、平家の負けとなつたので、熊谷次郎直実は、「平家の公達は船に乘ろうとして渚のほうへ落ちて行くであろう」と渚のほうへ馬を進ませて行くと、練貫に鶴を練つた直垂に萌黄匂の鎧を着て、鎌型打つた兜の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、滋藤の弓を持ち、連錢革毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗つた武者一騎が、沖の船をめざして、泳がせているのが目に入つた。

「よき大将かと見まいらする。敵に後ろを見せたもうか、返させたまへ」と扇で差し招いた。その武者は引きかへしたところを波打ち際に馬をおしならべ、むずと組んでどうと落ち、とりおさへて首

をかこうとした。

このところを謡のキリで『後ろより、熊谷の次郎直実、遁さじと、追づ駆けたり敷盛も、馬引き返し、波の打物抜いて、二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて、引つ組んで、波打ち際に、落ち重なつて、遂に打たれにけり』と謡う。

熊谷は、取押え首を搔こうと兜を押し上げてみると、顔に薄化粧し
お歯黒はぐろをつけた、我が子の小次郎くらいの十六七の美少年である。

よき公達、この人一人を討てばとて、勝戦に負けることもあるまい
この若殿の父は、子が討たれたと聞いたら、どのように嘆き悲しむ
か、よしよし助けまいらせんと、後ろを振り返ってみると、土肥、
梶原が五十騎ばかり近づいてくる。「いかにも助けまいせんとは
存ずれど、味方の軍兵、よもお逃がし候まじ、あわれ、直実が手に
かかり候へ、後世の供養つかまつらん」と泣く泣く首をかき斬った。
首を包もうと、直垂を解いてみると、錦の袋に入れた笛が腰にさし

てあつた。「さては、この夜明けに、城の中で管弦の音がしたのは、
この人達であつたか」『さても如月六日の夜にもなりしかば、親に
て候経盛我等を集め、今様を謡ひまい遊びしに、さてはその夜の御
遊びなりけり、城の内にさも面白き笛の音の、寄手の陣まで聞こえ
しは』と謡ふ。

この笛は、祖父の忠盛が笛の名手で、鳥羽院から賜つたものを、父
の経盛が貴いうけ、敷盛が名手であつたため、これを持たしたもの
で、その名を小枝といった。謡曲の前上歌で『好ける心に寄竹の、
小枝蝉折様々に、笛の名は多けれども、草刈りの吹く笛ならばこれ
も名は、青葉の笛と思し召せ』と謡つて いる。

今度一ノ谷にて討たれ給へる平家の一門の人々は、越前三位通盛、
弟藏人大夫成盛、薩摩守忠度、武藏守知章、備中守師盛、尾張守清
定、淡路守清房、経盛の嫡子皇后宮亮経正、若狭守常俊、その弟大

※小学生唱歌
笛の名前
にも出てくる

夫教盛以上十人とぞ聞こえしとあります。そのうち五人が謡に謡わ
れています。

平家物語では、そのうち經正、知章、通盛の討死の様子は教盛、忠
度の様に詳しく述べて書かれていません。

生田教盛は法然上人があるとき賀茂へご参詣されたとき、松ノ下に
箱の蓋に二才くらいの男の子が捨てられてあつた。不憫思われ連れ
て帰られて育てられた。この子が十才くらいのとき、両親のないこ
とを嘆くので、説法の時このことを話された。その時若い女が走り
て、我が子であると言う。密かに尋ねられると、教盛の子だと言
う。この子はせめて夢にでも自分の父の姿を見たいと、賀茂の明神
に祈誓しているという賀茂の明神の御告げで生田の森へ来るのが前
提である。

そこで、明神が憐れみ閻魔に使いされ、閻魔から今宵かぎの暇を貰
い、親子の対面を許されたと、教盛の幽靈が出てくる。そして、

『然るに平家の、栄華を極めしその始め、花鳥風月の戯れ、詩歌管弦の様々に、春秋を送りしに』：とそれから木曾のため一門が西海上に落ち、再び一ノ谷にきたが、範頼義経に攻められ、皆散り散りとなり、生田川に破れたと物語をする。

後半は、子供との名残りで約束の時が過ぎたと、閻魔が怒り、使者を寄越す、そしてこの使者との戦い、このような苦しみを見せたが、後をよく弔つてほしいと消え去る。とちょっと変わった曲である。

経正（巻七 経正の都落ち、青山の沙汰）

経正は、平家が寿永二年都落ちしたとき、五六騎の侍を連れて仁和寺へ法親王にお暇乞いをしようと思つた。それは幼い頃仁和寺のお室の御所に、稚児として使えていた。経正はその日、紫地の錦の直垂に、ばかりの萌黄の鎧を着て、長覆輪の太刀を佩き、切ふの矢を

※切ふの矢
がまだらの黒と白
といふのをなしふ

負い、滋藤の弓を持った姿であつたので失礼な姿であるからお目に
かゝりたいが、御遠慮すると言うのを、「構わぬ、その身なりで参
るがよい」と仰せられた。

経正は宮に「先年下し候ひし青山、名残りは尽きず存じ候へども、
さしもの我が朝の重宝を、田舎の塵になさん事の口惜しう候へば、
參らせ置き候、都へ帰る事も候はば、その時、重ねて下し候め」と
赤地の錦の袋に入れた御琵琶を差し出した。

そのとき行慶は小師であった。

『経正』の曲のワキはこの行慶であり『これは仁和寺御室に使え申
す僧都行慶にて候』といい、『さても平家の一門但馬の守経正は、
いまだ童形の時より、君御寵愛のめならず候……また青山と申す
御琵琶は、経正存生の時より預けくだされ』といつてゐる。

青山の琵琶の由来は、昔仁明天皇の御代の嘉祥三年の春、藤原貞敏
が、大唐の琵琶の博士廉承武より、玄象、獅子丸、青山の三面の琵

琶を授けられたが、謡曲『玄象』に謡ふように、帰國の途中、龍神にとられ、二面を持ち帰り帝の宝物とした。

村上帝の聖代応和年間、帝が玄象で琵琶びわを弾たんじられているとき、廉承武しげぶの幻が現われ、青山あおやまをとり、三曲の秘曲のうち一曲を伝授した。しかしその後、誰も恐れて青山を弾ずるものはなく、仁和寺の宮のもとに置かれてあつたのを、宮は経正を愛するあまりこの琵琶を授けられた。

青山と名づけられたのは、琵琶の背面は紫藤の木材で、表の撥面ばくめんに夏山の峰の木の間から、有明の月の出る様が描かれていることからきている、世に稀な名器であった。

『経正』では、経正が今度の西海の合戦で討死したので、宮は管弦かげん講で弔わせられた。すると経正の亡靈が『手向てむかけ下さるゝ青山の御琵琶ひわ、義婆しやばにての御許ごきされを戴り、常は手償てながれれし四つの縁に、今も引かるゝ心ゆえ、聞きしに似たる撥音の、これぞ正しく妙音の』と

現われる。

曲は修羅物であるが、源平の戦物語ではない。

知 章 (巻九 濱戦のこと)

『知章』という曲は、謡曲二百番（曲）で、能を舞われることは少ない。私は見た記憶がない。西国からの僧が磯辺にたてられた卒都婆に故平の知章と書かれたのを見て、平家の一門の人の誰かのものだらうと回向をしていた。シテが出てきて『げにげに遠國の人にてましませば、知ろしめさぬは御理、知章とは相国三男、新中納言知盛の御子息にて候、如月七日の合戦に、この一ノ谷にて討たれさせ給ひて候』といふ。そしてワキの問い合わせて『さて知盛は、あれに見えたる釣船の程なりし、遙かの沖の御座船に、追いつき助

*相国・清盛

かり給ひて候…あれまで小舟に召されてか…いや馬上にて候ひし、
その頃井上黒とて屈強の名馬たりしが、二十余町の海の面を、易々
と泳ぎ渡り、主を助けし馬なり、されども船中に所なし間、乗する
人もなくして、またもとの汀に泳ぎ上がり、この馬主の別れを慕ふ
かと思しくて、沖のかたに向かい高嘶たかいななききし、足搔あしむなききしてぞ立つたり
ける』と話す。その後、曲の後半は一ノ谷の合戦の様を謳ふ修羅物
であるが、平家物語では、新中納言知盛の郷は、生田の森の大将軍
にておわしけるが、その勢、皆落ち失せ、討たれにしかば、御子武
藏守知章、侍に監物太郎頼方、主従三騎、汀の方に落ち給ふところ
に敵おしかけ奉る、その中の大将と思しきもの、新中納言に組み奉
らんとて、馳せ並ぶところに、知章は父を討たせじと、中に隔へだたり
おし並べ、むずと組んで、どうと落ち取つておさへ首をかき、立ち
あがらんとし給ふところを、敵の兵と落ち合わせて、首を取られる、
監物太郎その兵を討つも、膝口を射貫かれ討死にす、とある。

謡曲ではクセに『御座船を窺ひこの汀にうち出でたりしに、敵手繁くかゝりし間、また引き返し打ち合ふほどに、知章監物太郎、主従此処にて討死にする』と謡ふ。また、キリで『団扇の旗は児玉の勢か、物々しと言ふまゝに、監物太郎が放つ矢に、敵は旗さしの、首の骨範深に射させて真つ逆様に、どうと落つれば、主人とおぼしき武者、新中納言を目にかけて、駆け寄せて討つところを、親を討たせじと、知章駆け塞がつて、むづと組んでどうと落ち、取つて抑へて首搔き切つて、起き上がるところを又、敵の郎等落ちあいて、知章が首を切れば』と謡つてゐる。その後、知盛が、沖の船に乗り移り、子の討たれるのを見捨てたことを『知盛その時に、大臣殿の御前にて、涙を流しのたまはく、武藏の守も討たれぬ、監物太郎頼賢もあの汀にて討たるゝを、見捨てゝこれまで参ること、面目もなき次第なり、如何なれば、子は親のため、命を惜しまぬ心ぞや、如何なるおやなれば、子の討たるゝを見捨てけん、命は惜しきものなりと

て、さめざめと泣き給へば外の袖も濡れにけり、大臣殿ものたまはく、武藏の守りはもとよりも、心剛にしてよき大将と見しそとて』と自分の子、清宗の方を見て涙を流された。

謡の後半は平家物語と全く同じである。

通 盛 (巻九 落足のこと、小宰相のこと)

越前三位通盛は山の手の大将軍であつたが、引き連れていた軍勢は皆落ちたり、討たれた、弟の能登の守とも大勢に押し隔てられて離れてしまった。心静かに自害しようと東に向かって行くうちに、近江の国の木村三郎成綱、玉井四郎資景など七騎に取り囮まれて、遂に討たれてしまった。平家物語で通盛の討たれた様子はこれだけしか書かれてない。では謡曲では、キリのところに『あつばれ通盛も名ある侍もがな、討死にせんと待つところに、すはあれを見よ好き

敵に、近江の国の住人に、木村の源五重章が、鞭をあげて駆け来る。
通盛少しも騒がず、抜き設けたる太刀なれば、兜の、真向ちよると
打ち返す太刀にて差し違へ共に修羅道の苦を受くる』とだけである。
通盛の曲の特色は修羅物に前後ともツレの女を登場させることであ
る。謡曲では出陣の前の日に、武人が愛妻との別れを惜しんだとい
う平家の公達らしい優しさを現わして、しかも修羅物としての平家
の武士の哀れさも表現しようとした物であろう。そのために前半で
はシテ、ツレを漁翁と女を登場させて小宰相の局の入水のさまを、
『さるほどに小宰相の局乳母を近づけ、いかに何とか思ふ、我頼も
しき人々は都に留まり、通盛は討たれぬ、たれを頼みてながらふべ
き、この海に沈まんとて、主従泣く泣く手を取り組み舷に臨み、さ
るにてもあの海に沈もうずらめ、……乳母泣く泣く取りつきて、
この時の物思ひ君一人に限らず、思しめし止まり給へと、御衣の袖
に取りつくを、振り切り海に入る』と謡っているが、平家物語では

通盛の侍君太瀧口時貞が主君の命で生き延び、その最後の様を小宰相の局に伝へる。小宰相の嘆きは一方ならず、四五日して、もしやの頼みも少なくなり、十三日の夜に、乳母に、出陣の前夜、これが最後の別れになるかと思い日頃は隠していたがお耳に入れたらたいそう嬉しそうに「通盛三十才になるまで、子と言うものがなかつたが、同じ生まれるなら男子であると良い」と言われた。乳母は「たとへ身を捨てて蓮^{はす}へと思し召されても、必ず背の君と巡り合うとは限りません、それより静かに身二つになられせられ幼方を育てられませ」とかきくどいた。乳母が少しうとうととした間に、そっと起きて、しづかに念佛をとなへ、千尋^{ちひろ}の海に沈んだとあります。

小宰相の局は、上西門院に使へ、禁中第一の美人といわれ、十六才の頃、中宮亮であった通盛に見染められた。始めは歌を詠み、文を頻繁^{ひんぱん}に通わせたが、受けいれられる気配もなかつた。通盛は最後の文を書き、小宰相の車に投げ入れた。小宰相は気がついたが道へ投

げ捨てるわけに行かず、袴の腰にはさみ御所へいった。場所もあらうに女院の前にこれを落とした。女院はこれを読まれ「あまり情けの強気も、かえってあだになるものだ」と小野小町に心を掛ける人は多かつたが、情けに強くて人になびかず、その報いで、百才の老婆となつても、一人あはら屋で、からうじて露命をつないだという例をひかれた。お陰で三位は、美貌な女房を給わつて、幸福の花を手にし、お互に深く愛し愛いされて西の海の舟にまで伴われ、遂に仲よく同じ帰らぬ旅に立たれた。と結んでいる。

謡本に、同じ日の催能に『莫上』の曲があるときりの文が『誦誦の声を聞くときは、誦誦の声を聞くときは。修羅の苦患を滅して弘誓の舟に法の道、彼岸に早く到りつゝ成仏得脱の身と成り行くぞ有難き身と成り行くぞ有難き』となるとあります。

千 手

(卷十 千手の前のこと)

謡曲の『千手』のことを書く前に、ツレに出る一ノ谷で生捕られた重衡のことが平家物語に多く出てくる。

物語はさかのばるが(巻五 奈良炎上)治承四年都では、高倉宮を奉じて頼政らが兵を起こしたとき、南都と三井寺の大衆が宮を受け取り、或いはお迎へしようとした。これはみな朝敵行為である、よつて奈良をも討つべしと評定があった。この噂はたちまち伝わり、奈良の大衆の騒ぎとなつた。関白より奈良の僧徒へ「何事にても存する旨あらば奏聞に及ぶべし」と使者を使わされたが、また毬杖の玉を「これこそ入道の頭」と名づけて「打て、踏め」と囁した。

このような南都の騒ぎを静めようと入道相国は、妹尾三郎兼泰の五百騎に「僧とは狼籍するとも、手出しはならぬ、弓矢などは帯すな」と厳命した。そんなことは知らない南都の大衆は、この兵の六十余人の首を斬り、猿沢の池の端にかけならべた。清盛は大いに怒り、

遊戯
杖で玉を打つ
※毬杖

さらば南都を攻めよと、大将軍に頭中將重衡に命じ四万余騎が奈良へ向かった。南都も奈良坂、般若寺二ヶ所の道を掘り切り、

を引きのべた。一日戦い夜になり、両城郭共に落ちた。夜戦になり重衡が般若寺の門の前に立ち「火をかけて明かりを取れ」というと兵が逆茂木の木を割り、これを松明にして在家中に火をかけた。

この夜は風が強く、吹き迷う風に炎はひろがり、東大寺の大仏殿、興福寺、東金堂、西金堂など多くの伽藍がらんが焼失し、焼け死んだ人は三千余人に及んだ。二十九日重衡は南都を討ちしたがえて都へ帰った。このことがあり、重衡は最後に奈良に渡され斬られたとある。

重衡は、生田の森の副将軍であつたが、ひきいる軍勢は皆落ちてしまつて後藤兵衛と主従二騎、助船に乗りようと渚の方へ出るが、うしろより敵が迫り船に乗り逃れる暇がない、源太景季みなとがわ、刈茂河かりもを渡り板宿、須磨を通りすぎて西を目指して落ちて行く、迫っていた梶原源太景季は追いつけそうないので、もしやを頼みに遠くから矢を

射た。それが重衡の馬の後ろ足に突き刺さった。馬の弱るのを見て兵衛は一散に逃げた。重衡は馬は弱るし、海へ身を投げんとされたがそこは遠浅であった。腹を切らんとされたところへ梶原より先に庄四郎義家が駆付け、自分の馬に乗せてつれ帰えった。

十四日、生捕りになつた重衡は、網代車あじかにのせられ、前後を土肥実平の兵に囲まれ、六条を東に引き回された。

法王の御所からの使いで「屋島に帰りたくば、一門の人申し送り、三種の神器をお返し奉れ、さすれば屋島へ帰してつかわすとのご意向である」といわれた。「宗盛以下重衡の命をもつても帰そうと言つものはないでしよう、しかし法王のお言葉ですので一度一門へ申し送つてみます」と使いを出したが、宗盛からは「法王が、亡父の忠節を思い下さるならば恐れ乍ら四国へご幸さるべきだと存じます。その時こそ我等一同は院宣いんせうを奉戴ほうたいして、会稽かいざいの恥はじけをすすぐであります」と返事してきた。こうしたことは前から予想したことであつ

たが、しかしこれが都へ着いたので、いよいよ関東へ差し下されるにきまつてゐると思うと心細くなり、土肥次郎に「出家したいがいかがであろう」と申し出られた。

『千手』の曲では、奈良炎上のことを『口惜しや我一ノ谷にて如何にもなるべき身の生捕られ、今は東の果てまでも、かやうに面をさらすこと、前世の報いと言ひながら、また思はずも父命により、仏像を亡ぼし人壽を断ちし、現當の罪を果たすこと、前業よりなお恥かしうこそ候へ』と謡ひます。

さて「街道下り」で重衡を鎌倉へ下そうと言うことになり、梶原兵三景時に守られて鎌倉へ下った。

謡曲では、このところは『げにや世の中は、定めなきかな神無月、時雨降りおく奈良坂や、衆徒の手に渡りなば、とかくにも果てはせで、また鎌倉に渡さるゝ、此処は何處ぞ八橋の、雲居の都いつかまた、三河の国や遠江、足柄箱根うち過ぎて、明けもやすらん星月夜、あしがら

※現世の罪が現世で報われること

鎌倉山に着きしかば』の数行であるが、平家物語では、山科の四の宮河原へきかゝると、蟬丸が魔で琵琶を引いた物語を、三河の八橋へきかゝると在原の葉平のこと、池田の宿へ着くと

いかにせん都の春も惜しけれど

なれしあづまの花や散るらん

熊野の歌の老母を思う歌のこと、そして清見が関、足柄峠をこえ鞠子川を過ぎ、七里が浜と急がない旅といいながら、日数を重ねて鎌倉に着く様子が書かれています。

千手の前の項になります。平家物語と謡曲とは大分異なります。

又、謡曲のツレの謡出で『身はこれ槿花一日の栄、命は蜉蝣の定めなきに似たり、心は蘇武が胡國に捕われ、岩窟の内に籠められて、君邊を忘れぬ志、それは衛律が謀計にて、敵を亡ぼし舊里に帰る』と謡うところは「殷の湯王は、夏の桀王によつて夏台にとらわれ、周の文王は殷の紂王にために羑里に捕われる」とある。

＊むくげの花

＊かげろう

＊支那の地名

さて頼朝は狩野介宗茂（謡曲のワキ）に重衡を預けた。

狩野介も情けある人でいろいろと重衡をいたわり、湯殿を準備し入浴させたりします。その時に年二十才ばかりのたいそう美しい女性が世話をします。「何事でもお望みがあれば、承ってきて伝えよ」と頼朝殿よりの仰せです」重衡は「このような身になり、何を望みましよう、ただ出家したいが望みです」

女性が頼朝に伝えると、頼朝は「この私の敵ならばともかく、朝敵としてお預かりしているものに出家など断じて許されるものではない」と一蹴した。出家のことは『いかに千手の前、昨日あからさまに申しづる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ、さん候その由申して候へば、朝敵の御事なるを私として、出家を許しもうさんごと、思ひも寄らずとこそ候ひづらめ』としている。

都では、土肥次郎の情深い心地で法然上人に会わせてもらい、上人は出家しない人も戒律を守ることは当たり前ですと、剃刀を額に

*この女が千手
です

あて、髪を剃る真似をして、戒律をあたへたとあります。

この後その日の夕方より雨が降りだした。

『今日の雨中の夕べの空、御徒然を慰めんと、樽を抱きて舞いりつ
づ既に酒宴を始めんとす、千手もこの由見るよりも、御酌に立ちて
重衡の、御前にこそは參りたれ、今は何時しか憚りの、心ならずには
思はずも、手まず遞る盃の、心一つに思ふ思ひ、、それそれいかに
何にても、御着にと効むれば、その時千手とりあへず、羅綺の重衣
たる、情けなきことを機婦に妬む』これは、太宰府に流された菅原
道直作の一節で……縹緥の薄物でさえ重く感じられ、これを織った機
織女の無情をうらむ：というのは、このように気を遣つて、おもて
なししているのに、どうして不機嫌でいらっしゃるのかと意味を持
たせて歌つた。『十惡といふとも、引換す』……十惡の罪人でも御仏
は淨土へすべしまいらす：と重衡も唱和した。

そしてもう一つと所望されると千手は『一樹の蔭や一河の水、皆こ

れ他生の縁と云う』と白拍子の舞歌を歌いました。重衡も興に乘じて、琵琶を弾かれた。

その後、重衡は南都に渡されて、斬られるのであるが、その途中で日野に住む女房の大納言の典侍殿に会い、一時の別れを惜しんだ。

南都に着き、木津河の辺で斬られ、その首は般若寺の門前にさらされたが、東大寺の俊乗上人が請い受けられ、日野へ送られた。

それを付近の山寺の法界寺で死体と共に荼毘だひにふし、骨を高野山に送り、墓は日野に建てた。

又、千手の局は、髪を切り黒染めの衣に姿を変え、信濃善光寺に隠れ住み重衡の後世の菩提ぼだいを弔つた。

謡曲のクセのなかで『燈火暗いたひくろうしては、數行すこう虞氏ぐうしが涙なみだを』の意味はむかし支那で漢の高祖と楚の項羽こうぐうとが帝位を争い、合戦七十二度に及んだが、その都度項羽が勝つた。しかし最後の戦に負け、一日に千里を行くという難づといふ馬にまたがり、寵愛の后虞氏ごうぐうしを連れて逃

げ落ちようとしたところ、馬が動こうとしない。項羽は涙を流しながら「我が威勢は、もう廢すたれてしまった。今は逃れようもない、敵の襲撃は物ともしないが、后のお前と別れるのが悲しい」と嘆かれた。夜も更け燈も暗くなってきたので、虞氏も心細くなつて、涙を流された」というのが橋広相公が作られた詩である。

実は、三月十八日テレビの「能、狂言鑑賞入門」で観世の家元の、「熊野」を見ていたら、解説で平家物語の巻十にあるが、いう話をされていた。熊野は平宗盛の愛妾である。巻十は平の重衡が鎌倉へ下るところである。

平家物語には、重衡が「池田の宿ににも着き給ひぬ。かの宿の長者熊野が女侍従がもとに、その夜は三位宿せられけり。侍従、三位の中将を見奉つて「日ごろは傳にだに思しめし寄り給はぬ人の、今日はかかる所へ入らせ給ふ事の不思議さよ」と一首の歌を奉る。

やゝあつて中将、梶原を召して「たゞ今の歌の主はいかなるものぞ。やさしうも仕つたるものかな」と宣へば、景時申しけるは「君は未だ知ろし召され候はずや。あれこそ屋島の大殿の、未だ当國の守にて渡らせ給ひし時、召され奉らせて、御寵愛候ひしに、老母これを留め置き、常は暇を申ししかども、給わざりければ、頃は弥生の

平の宗盛
平治元年
三才で遣江十
守となる

初めにてもや候ひけん、

いかにせん都の春も惜しけれど なれし東の花や散るらん

※

遊女

という名歌仕り、暇を賜つてまかり下り候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける、と書かれている。謡曲本には、宗盛の愛したの熊野の女侍従らしいが、曲では熊野としていると書かれている。

謡曲の『熊野』は、このことを元にして作られたものである。

熊野は平宗盛の愛妾あいしょで、都に住まいしていた。池田の宿に残つていた老母が病身で心弱くなり、召し使う朝顔に『暫しばしの御暇を賜りて、今一度まみえおわしませ』さなぎだに親子は一世の仲なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にも外れ給ふべし、ただ返す返すも命の内に今一度、見參らせたくこそ候へとよ、老ぬれさらぬ別れのありと云へば、いよいよ見まくほしき君かなと、古画までも思ひ出の涙ながら書き留む』といふ手紙を持つて行かせる。この手紙をワキの宗盛の所へ持つてゆき、読むのであるが、ここを『文の段』と云

※この手紙の始め「甘泉殿の春の夜の夢」は

謡の武市が贈贈李夫人と繋りを續めた甘泉殿の春の夢も、夫人の死によつて政市傷心の想となり、震の玄蕃が楊貴妃と誤った鴨山喜の國かな語ひも、遂に楊貴妃の横死による悲しい結局がきた。

シテの謡の聞かせ所である。又、能の小書で『読次の伝』では、手紙の途中からワキと一緒に謡ふ演出もある。

さて、その手紙を読み、暇を乞うたが、花見の供を強いられ止むな車に同車して、清水に行き、花見の酒宴に所望されて舞を舞う。

この道中の景色の様の謡は『四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙色めく花衣袖を連ねて行く末の、雲かと見えて八重一重咲く九重の花盛り名に負う春の景色かな』『河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心のほどもなく、車大路や六波羅の地藏堂よと伏し拝む、……愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや、げに恐ろしやこの道は、冥土に通うなるものを心ぼそ鳥部山……こゝより花車、おりゐの衣櫻磨漏飾磨の徒路清水の仮の御前に、念誦して母の祈誓ねんじを申さん』と実に良い文句である。

又、熊野が舞いを舞うクセの部分もすばらしく、クセの前半の一節には、平家物語の始めにある『祇園精舎の鐘の声、諸行无情の響き

沙羅雙樹の花の色、盛者必滅の世の習ひ』と謡い、後半では『南を

謡曲では
生者必滅と書
いている

遙かに眺むれば、大悲擁護の薄闇、熊野権現の移ります御名も同じ

だいひようごう らすがみ

今熊野、稻荷の山の薄紅葉の青かりし葉の秋また花の春は清水のた
ゞ頼め頼もしき春も千々の花盛り』と謡ふ。

舞の途中で俄に村雨が降り、花の散らすのを見て

いかにせん都の春も惜しけれど

馴れし東の花や散るらん

という歌を詠み、宗盛も哀れに思ひ暇を与える、これも清水觀音の
御利生と喜び、東へ帰った。

能で『村雨留』の小書のときは、途中でを村雨の降る感じを出すた
舞いを短くするとか、『膝行留』^{しゃこうじゆ}では、歌を書いた短冊をワキに渡
す所作等、常の能より少し変わるものがある。

謡では、『熊野』『松風』米の飯といわれ、いくら謡っても飽きない
と言われるほどの曲である。

藤戸 (巻十 藤戸)

観世本に、吾妻鏡では元歴元年十二月七日と書かれているが、平家物語では寿永三年九月二十五日となっているから、平家物語によつたのであろうとある。

この曲は、藤戸の戦いで先陣の功によつて備前の児島を賜つた佐々木盛綱が、初めて自分の知行所へ來た。そして領民に訴えたいことあれば申し出よといったところより始まる。すると一人の老婆が、『因果は巡る小車の、やたけの人の罪科は、皆報いぞと言ひながら、我が子ながらもあまりげに、科も例も波の底に、沈め給ひし御情けなさ、申すにつけても便なけれども、御前に参りて候なり』といふ。盛綱は『なにと我が子を波に沈めし恨みとは更に心得ず』と聞いてみると、藤戸の合戦のとき、浦の男に海の浅瀬を教えてもらうが、下郎は安心ならない、又、他人にも話すかもしけんと、この男を殺した、その母であつた。

さて平家物語では、寿永三年九月十二日、三河の守範頼が平家を追討するため西国へ向かった。侍大将に土肥次郎実平、三浦介義澄、畠山庄司次郎重忠、佐々木三郎盛綱ら総勢三万余騎、都を立つて播磨の室津むろづへついた。

平家の方では、大将軍に小松の新三位中条資盛、侍大将に飛驒三郎左衛門景経、越中次郎兵衛盛嗣、悪七兵衛景清ら五百余艘の兵船が、備後の児島に着くというので源氏は室を出発して備前の西河尻、藤戸に陣をはつた。

源氏と平家の陣の間は、海上五町ばかり、舟がないと渡れないのにで源氏の軍勢は向かいの山に宿陣して、空しく数日を送つた。

九月二十五日（謡曲では三月二十五日）の夜、佐々木三郎が浦の男一人を小袖や銀作りの短刀き与えて説き伏せ「この海を馬で渡る浅瀬はないか」と聞く。

ここからは謡曲と全く同じである。ワキの語りで

『さても去年三月二十五日の夜に入りて、浦の男を一人近づけ、この海を馬にて渡すべきところやあると尋ねしに、かの者申すよう、さん候河瀬のやうなる所の候。月頭には東にあり、月の末には西にあると申す、即ち八幡大菩薩の御告げと思ひ、家の子若党にも深く懼し、かの者ちたゞ二人夜に紛れ忍び出で、この海の浅みを見置きてかへりしが、盛綱心に思ふやう、いやいや下郎は筋なき者にて、又もや人に語らんと思ひ、不憚には存じしかども、取つて引き寄せ二刀刺し、そのまゝ海に沈めて帰りしが、さては汝が子にてありけるよな、よしよし何事も前世のことと思ひ、今は恨みを晴れ候へ』と語る。

翌二十六日、平家は小船を漕ぎ出して、「この海を渡つてこい」と叫う。佐々木盛綱は家来七騎と共に、さんぶと海に乗りいれた。

盛綱はどんどんと海を渡つて行く、三河守はこれを見て「海は浅いぞ、渡れ、渡れ」と号令をかけると、三万余騎の大軍は皆に乗り入

れて海を渡った。平家も舟をつらね、散々に矢を射た。源平互いに乱戦となり、終日闘い続けて夜に入り、平家は沖へ、源氏は児島にあがり人馬の息を休めた。その後平家は屋島へ帰った。源氏は舟がないので追って行くことはできなかつた。

「昔から今迄、馬で河を渡つたわ者はあるが、海を馬で渡すことは珍しいことである」として、備前の児島を佐々木にあたへられた。これが藤戸の戦いであるが、謡曲では曲の後半、盛綱はあまりにかの者は不憚よびんであると、弔ひょういをする。その時、かの者の亡靈が現われ「罪があればどんな重い罪科ひょうこうを受けるもしかたがないが、御弔いは有難けれども、恨みは尽きぬ妾執めうじきを、申うさんために來たりたり」とあらわれる。そして『藤戸の渡り教えよと、仰せも重き岩波の、

川瀬の様なる浅みの通りを、教えしまゝに渡りしかば、弓矢の御名ごめいをあぐるのみか、昔より今に至るまで、馬にて海を渡すこと、稀代まれたいの例なればとて、この島をご恩に賜るほどの、御喜びも我ゆえなれ

ば、如何なる恩をも、賜ふべきに』と恨む。

この後、この曲の一一番の見せ所、聞かし所である、かの男が殺された場面、そして最後に弔いの法を聞き、成仏して行く所がある。

少し長いがそこを書きますが、このところは、所作も見応えがあり、謡のリズムが良い。

前の賜ふべきにの、あとは『思ひのほかに一命を、召されし事は馬にて、海を渡すよりも、これぞ稀代の例なる。さるにても忘れがたや、あれなる、浮洲の岩上に我を連れて行く水の、氷のごとくなる刀を抜いて、胸の当たりを、刺し通し、刺し通さるれば肝魂も、消え消えと、なるところを、そのまま海に押し入れられて、千尋の底に沈みしに、折節引く汐に、引かれて行く波の浮きぬ沈みぬ埋木の岩の、狭間に流れかゝつて、藤戸の水底の、惡龍の水神となつて恨みをなさんと思ひしに、思はざるに、御弔いの、御法の御舟に法を得て、即ち弘誓の舟に浮かめば水馴神、さし引きて行くほどに、生

死の海を渡りて願ひのまゝに、やすやすと、彼の岸に、到り到りて
成仏解脱の身となりぬ、成仏の身とぞ成りにける』と謡つて終わる。

屋島の合戦（平家物語卷十一）

さて「屋島」の話になるのですが、平家物語に元歴二年正月、義經院参して「平家は神明にも放たれたり、君にも捨てられ参らせはて、都を出、波に漂う落人となれり、今度義經は鬼界けいがい、高麗こうらい、天竺てんじく、震旦じんだんまでも平家を攻め落とさざらん間は、王城へ帰るべからざる」と法皇に奏聞され、宿所に帰り東国の侍たちに向かって「今度義經院宣を承り鎌倉殿の御代官として、平家を攻め亡ぼすべし陸は駒の足のかよはんを限り、海は櫓櫻らふりのたたむ所まで攻め行くべし」とこそ給いけれ、と命じます。

能の『安宅』や『正尊』『舟弁慶』に

『渡辺にて梶原が逆櫓の意見を承引し給はざりし遺恨いひんにより』と出てきますが、これは、今の大坂市上福島に舟を揃へます。その日は北風が激しく吹き、大波で舟を出すことができず、大名小名寄り合ひ評定したのです。梶原が「今度の合戦には、舟に逆櫓を立て候ば

*舟を漕ぐ櫓を前にも付け前にも後ろにも舟が進むようになります

や、馬は駆けんと思へば駆け、引かんと思へば引き、弓手へも馬手へもましやすく候。舟はさようのとき、きっと押しまわすが大事にて候へば、舳艤に櫓をたてちがへ、わい櫛を入れて、どなたへも安う押しまわすやうにし候はばや」と申しければ判官「先ず、門出のあしさよ、梶原の舟に逆櫓をたてうとも、義経はただ元の櫓にて候はん」云々とあります。

さて、酒肴して祝い、舟に兵糧、武具などを積み、「舟とう仕れ」と命じたが、水手楫取供が「順風には候へども、普通に過ぎたる風にて候、沖はさぞ吹いて候ふらん」と申しければ、義経大きに怒り「沖に出でぬる舟こわければとて、留まるべきか、野山の末にて死に、海川に溺れて失するも皆是先世の宿業なり、ただのときは敵も恐れて用心すらん、かかる大風大波に思ひも寄らぬところへ寄せてこそ思ふ敵をば打たんずれ」と打ち出した。このところを『舟弁慶』で『その上一年渡辺福島を出でしきは、以つての大風なりし

舟のへさきと
とも(船櫓)

に、君御舟を出し』と謡っているのです。

二月十六日（牛の刻）に福島を出、翌日（卯の刻）に阿波の地に着きました。ここから屋島に行くのですがその間のことは謡にはありませんし、あまり関係がないので省略します。

さて屋島での合戦の様子を謡ったのが『屋島』です。この曲は勝ち戦の曲として能でよく舞われます。

この屋島の曲は平家物語によつたもので、巻第十一「屋島軍」の始じめに「判官その日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧着て、鎧形打つたる兜の緒をしめ、金作りの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負い滋簾の弓を真中取り、沖の方を睨まへて、大音声を上げて、一院の御使い、檢非違使從五位の尉源義經と名乗る」とあります。能の『屋島』にも全く同じように謡はれています。

この曲は西国行脚の僧が屋島の浦で一夜を求めて、その老漁師より屋

鎧の威絲の色
目で上は白く
次第に裾が濃
い紫になつた
もの

鎧の威絲の色
目で上は白く
次第に裾が濃
い紫になつた
もの

弓の幹を簾
で巻いた弓

島での義經の大将振り、悪七兵衛景清と三保の谷四郎の鐵引、佐藤
繼信の最後など、合戦の様子を聞きます。

この様子は『いでその頃は元暦元年三月十八日のことなりしに。』

平家は海の面一町ばかりに船を浮かめ、源氏はこの汀にうち出給う。
大將軍の御出立には、……先の平家物語の通り……その時平家の方
よりも、言葉戰ひ事終わり、兵船一艘漕ぎ寄せて、波打ち際に下り
たつて陸の敵を待ちかけしに、源氏の方にも続く兵五十騎ばかり、
中にも三保の谷四郎と名のつて、真っ先かけて見えし処に、平家の
方にも悪七兵衛景清と名のり、三保の谷目がけて戦いしにかの三保
の谷はその時に、太刀打ち折つて力なく、少し汀に引く退きしに景
清追つかげ三保の谷が、着たる兜の鐵を掴んで、後へ引けば三保の
谷も、身を遁れんと前へ引く、互いにえいやと引く力に、鉢附けの
板より引きちぎつて左右へくわつとぞ、退きにけるこれを御覽じて
判官、お馬を汀に打ち寄せ給へば。佐藤繼義 矢先にかゝつて馬よ

り下にどうと落ちつれば、船には菊王も討たれければ、共に哀れと思しけるか船は沖へ陸は陣に相引きに引く沙の後は闇の音絶えて】と謡っています。

平家物語には「佐藤継信の討死に（継信の最後のこと）菊王の討死にのところは、能登殿、さしつ引きつめ散々に射候へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも真っ先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衛継信が弓手の肩より馬手の脇へつと射ぬかれ、しばしもたまらず馬より逆さまにどうと落つ、能登殿の童に、菊王丸と言う者、萌黄緘の腹巻に、三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をはつし、三郎兵衛の首をとらんと走りかかる。弟の四郎兵衛忠信、そばにありけるが、兄の首をとらせじとよっぴりひやうと放つ。草摺りのはづれをあなたへつと射ぬかれて犬居（四ッん道い）に倒れぬと書いてある。

そして後半に、有名な弓流しの場面をがります。【その時何とかしたりけん、判官弓を取り落とし、波に揺られて流れしに、その

折しもは引く汐にて、はるかに遠く流れ行くを、敵に弓を取られじ
と、胸を波間に泳がせて、敵船近くなりし程に、敵はこれを見しよ
りも、船を寄せ熊手に懸けて、既に危く見え給ひしに、されど熊手
を切り払い、ついに弓を取り返し、元の渚にうち上なまこがれば』と、自
分は弓が惜しいためでなくその弓を見て義経は小兵だと思われたく
ないためだと答えだとあります。

能で弓を取り落として敵前にこれを拾うという「弓流し」という
特別な所作があります。

弓流しのところは、源氏の兵うちいれ打ち入れ攻め戦ふ。舟のうち
より熊手をもって、判官の甲かぶとのところにがらりからりと二三度打ち
かかれば、判官如何がはせられけむ、弓を掛け落とされぬ。うつむ
き鞭をもつて搔き寄せて、とらうとらうとし給へば、御方の兵共
「ただ捨てさせ給へ捨てさせ給へ」と云ひけれども、終にとつて笑
つて帰られける。老武者が「千疋万疋にかへさせ給ふべき御だらし

なりとも、御命にはかへさせ給ふべきか」と云ひければ、判官「弓の惜しさにとらばこそ、もし叔父為朝が弓の様ならば、態とも落としてとらすべし、「これこそ源氏の大将軍源九郎義経が弓よ」など嘲弄せられんことが口惜しければ、命にかへて取るぞかし」といゝ能で義経がシテ（主役）として出てくるのはこの曲だけです。

前半のシテは漁翁でしたが、後半は義経（の幽靈）です。そして靈魂はこの世とあの世の生死の海たゞよに漂つていると云つて屋島の合戦を語ります。このように義経一代の中でも最も華やかな戦であったのを取り上げているのだと思われます。そして夜明けと共に消え去ります。

また、この合戦で童話などに出ている那須の余市の話（巻十一那須余市の事）は謡には出てこません。

一日戦い終わり、平家の舟は沖に、源氏は陸に陣を取った。

源氏の兵は、一昨日福島を出、大風大浪にゆられ、昨日阿波の国勝

浦につき、戦いをし、終夜中山越えをし、今日一日戦い、人も馬も疲れはてゝいた。平家の方は、能登殿その夜夜討せんと支度せられたが、越中次郎兵衛と海老次郎の先陣の争いがあり、空しく明けた。寄せたりなば、源氏なじかはたまるべき。寄せざりけるこそ、せめて運の極めなれ。と平家物語にある。

屋島の合戦は三月十八日であったが、渡辺、福島に残った三百余艘の舟は、梶原が先として二十二日に屋島に着いた。しかしそでに戦いは終わっていた「六日の菖蒲しょうぶ、^{ムカシ}會にあわぬ花」と笑われた。

その意味は、「五月五日の節句に間に合わない菖蒲、會々法会に間の合わぬ花」という事で、時期に遅れて動に立たないと言うことをいう。

役

先に出てきた佐藤継信の討死にの様子、景清の鐵引きなどの合戦の様子については、謡曲で『景清』はあるが、佐藤継信としては特にないが、『撰待さとりだい』という曲で、弁慶が継信の母に語るところがある。

この二曲とも、平家物語にはない。

豈景 景清

この曲は、別名「盲目景清」とも呼ばれるそうで、景清は平家物語でも、壇之浦の戦いではあまり出てこないし、『景清』の曲でも屋島の戦いの様を曲の最後に詠ぶ。景清は壇之浦の戦いでは、いざ方へか落ちたと書かれてある。それが『景清』の曲では宮崎に落ち、盲目の身となり、日向の勾等ひくとうと名をつけて隠れ住んでいた。

曲は鎌倉龜ヶ谷に住む、人丸という景清の娘が、宮崎に父がいると風の頼りに聞き、尋ねて行く。そこで一軒の薬屋わらやで、流され人の悪七兵衛景清を知らないかと尋ねと、私は盲目であるし見たこともないし、知らないと答へる。娘が去った後、景清は、独言で『不思議やな只今のものを如何なるものと存じて候へば、この盲目なるものの子にて候は

如何に、我一年尾張の国熱田にて遊女と相慣れ一人の子を儲く、女子なれば何のよう立つべきぞと思ひ、鎌倉龜ヶ谷の長に預け置きしが、
馴れぬ親子を悲しみ、父に向かつて言葉を交はす、声をば聞けど面影を見ぬ面目ぞ悲しき、名のらで過ぎし心こそながなが親の紳なれ』と
親子の情を謡ふ。

その後、娘は里人にあい、景清のこと聞くと、いま来られた道に藁屋があつたでしょ、そこに景清が居たのだと教へられる。そこには盲人しか居らなかつたといふ、それが景清だと言われる。里人は父に会いたがつて、人丸を哀れに思ひ、二人を対面させる。景清は『かしましかとましさなきだに、故郷のものとて尋ねしを、この仕儀なれば身を恥じて、名のらで帰す有様』と心の寂しさを謡ふ。

その後『日向とは日に向こふ』と謡うが、文章も、節も、又、その感じを表現する緩急の面白い一節がある。

また『御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に我が名も

顯るべしと、思ひ切りつゝ過ごすなり』この親子の哀れさを説ひ、娘の希望で屋島での高名を様子を話して聞かす。

『いそその頃は寿永三年三月下旬のことなりしに、平家は船源氏は兩陣を海岸に張つて、互いに勝負を決戦と欲す、能登の守教経宣ふよう、去年播磨の室山、備中の水島越えに至るまで、一度も味方の利、無かつし事。偏に義經が謀計しみじきに因つてなり、如何にもして九郎を謀計こそあらまほしけれと宣えば、景清心に思ふおう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば易かりなんと思ひ、教経に最後の暇乞ひ、陸に上がれば源氏の兵、餘すまじとて駆け向ふ、景清これを見て、景清これを見て、ものものしやと、夕日影に、打物ひらめかいて、切つてかゝれば休らへずして、刃向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにける遁さじと、さもうしや方々よ、に擣込んで、なにがしは平家の侍悪七兵衛、景清と、名のりかけ名源平互いに見る目も恥ずかし、一人を、とめん事は案の打物、小脇

のりかけ手取りにせんとて追うて行く、三保の谷が着たりける、兜
の鐵を、取り外し取り外し、二三度、逃げ延びたれども、思ふ敵な
れば遁さじと、飛びかゝり兜をおつ取り、えいやと引く程に鐵は切
れて、此方に留れば主は先へ逃げ延びぬ、遙かに隔てゝ立ち帰りさ
るにても汝、恐ろしや、腕の強きと言ひければ、景清は三保の谷が、
頸の骨こそ、強けれと笑ひて、左右と退きにける』と屋島での景清
と三保の谷の戦いぶりを語つてゐる。

根 待

これは平家物語にはない。これは壇之浦で平家を滅ぼした義経が、
梶原の讒言さんげんによつて、都落ちをし、奥州の藤原秀衡をたより落ち行
く道中で、岩代の国信夫いわしら のぶゆき（福島県、会津付近）で、屋島で討死にし
た佐藤継信の母と子の鶴若の接待を受け、その時に弁慶が屋島の合
戦における佐藤継信、忠信の働きを物語る。

『さても屋島の合戦、今は斯うよと見えしに、門脇殿の次男能登の守教経と名乗つて、小船に取り乗り磯間近く漕ぎ寄せ、いかに源氏の大将源九郎義経に、矢一筋まゐらせん受けて見給へとのゝしる。かう申す各々を初めとして、みな御矢面に立たんとせしが、何とやらん心法くれたりし処に、繼信は心勝りの剛の人にて、お馬の前に駆け塞がつて、義経これに在りやとてにこりと笑ひて控へたり。さてその時に、教経は、引き設けたる弓なれば、矢坪（やつぼ）を指してひやうと放つ、あやまたず繼信が着たりける、鎧の胸板押付揚巻（おしつけあけまき）、かけずたまらずつゝと射通し、後に控へ給ふ我が君の、御着脊長の草摺にはつたと射留む、さてその時に繼信は、馬の上にて乗り直らん乗り直（な）らんとせしかども、大事の手なればこらへずして、馬より下にどうと落つ、やがて我が君お馬を寄せて、繼信を陣の後ろに昇かせ、いかに繼信、いかにいかにと宣えども、たんだ弱りに弱つて遂に空しくなる』『あら愚かや忠信は、日の下に於いてかくれましまさず、

※矢を射込む
狙い所

能登殿の童菊王丸、継信が首を目がけ、渚の方に走りわたるを、忠
信引いてはなつ矢に、菊王が真中射通されかつばと転へば、教経舟
より飛んで下り、菊王が綿囃^{ぬたばみ}掴んで、遙かの船に投げ入れ給へば、
程なく船にて空しくなる。眼前の兄の敵をば、弟の忠信こそ取つて
候べ』と謡ふ。

＊鎧の左右の肩
にあたる部分

『屋島』では義経の弓流しを、『景清』は、景清と三保の谷の争い

を、『摂持』では、佐藤継信忠信兄弟の働きをと、謡うのである。

現曲として謡にはないが、屋島の合戦の前に巻十横笛の事以下で、
重盛の子、維盛のことが書かれている。小松の三位の中将維盛の郷
は、身は屋島にありながら心は都へ通われたり。故郷に留めおきし
北の方、幼き人の面影のみ、身にひしとたち添ひて、忘るゝ暇もな
かりければ、あるにかいなき我が身かなとて、寿永三年三月十五日
屋島を紛れ出で、紀伊の湊^{みなと}から山伝いに高野山へ行かれた。其処で
知り給へる聖^{ひじり}に会われ、知覚上人に髪をおろしてもらい出家された。

そして高野をたたれ、熊野へ向かわれ、三つの御山を参詣し瀬の宮より船に乗られたが、その沖に山なりの島というところで、「祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海、親父小松内大臣左大将重盛公法名淨蓮、三位の中将維盛法名淨圓、年二十七歳、寿永三年三月二十八日、那智の沖にて入水す」書き置いて、沖へ出て入水された。

義経は、屋島でうち勝ち、周防の地へ押し渡り、範頼と一つになります。

「源氏の舟は三千余艘、平家の舟は唐船少々交わり。さる程に、元歴二年三月二十四日の卯の刻に長門の国赤間あかまが関、壇之浦にて源平の矢合とぞ定めける。判官と梶原とどし軍既に戦せんとす、梶原申しけるは「きょうの先陣をば景時にたび候へかし」判官「義経なくばこそ」梶原「まさなう候殿は大将軍にてましまし候ふものを」判官「其は思ひも寄らず、鎌倉殿こそ大将軍よ、義経は奉行を承つたる身なれば、ただわ梶原と同じことぞ」と宣へば、梶原先陣を所望しかねて「天性此の殿は侍の主にはなり難し」とぞつぶやきける。判官「日本一のおこの者かな」とて 太刀のつかに手をかけ給ふ。

梶原も「鎌倉殿よりほかは主をもち奉らぬものを」とて、これも太刀のつかに手をぞかけける。されど判官には三浦介取りつき奉り、

梶原には土肥次郎つかみついて、両人手をすって申しけるは「これ程の御大事を前にかかへながら、どしくさ候ひなば、平家勢いつき候ひなんず、かつは鎌倉殿の帰り聞こし召されん所も穩便ならず」と申しければ、判官しづまり給ひぬ。梶原も進むに及ばず。とやうことで、どうもこの二人は気が合わなかつたようです。

平家物語にはこの合戦の様子が詳しく書かれているが、両軍の間は海の面僅かに三十余町の隔たりである。門司、赤間、壇の浦は、潮の早い急流であった。平家の船は心ならずも潮に向かつて押し流される。源氏の船は潮に乗つておつて出た。沖は潮の流れが速いので、梶原は汀に船をつけて、行き違う船を熊手にかけて引き寄せ、つぎつぎと敵の船に乗り移りながら、親子主従打ち物をふるい、散々に敵を蘿^わぎ倒した。その日の高名の一の筆に記された。

謡曲には、平家の最後の様子を謡つた曲に「碇瀧」という曲があります。

『碇潛』といふ曲は、旅の僧（平家の所縁のもの）が一門の者を用うために長門へ来ます。そこで舟夫から壇之浦の合戦での教経の奮戦の様子、義経の所謂八雙飛びなどを聞き、曲の後半では平知盛の亡靈が現われが、知盛が碇を兜の上に戴き最後遂げる有様を見せると全く合戦ものであります。

【さてもこの壇之浦の合戦、門脇殿の次男、能登の守教経小船に取

り乗り大是刀を莖^{よね}に取り延べ、此處彼處を薙^{なぎ}給ふにぞ、兵多く亡

びにけり、その時新中納言使者を立て、せんなき能登殿の振舞かな、

さればよき敵にてもあらばこきと宣ひければ、さてはこの言葉は、

大将と組めと言ふことにてやあるらんとて、敵の船に紛れ入り、九

郎判官を尋ね給ふ、如何がはしたりけん判官の船に 乗り移りぬ能

登殿喜び打つて懸かる、判官これを見て、敵はじとや思ひけん、長

刀脇にかい挟んで、二丈ばかりの味方の船にゆらりと飛び乗れば、

教経はせん方もなく、長刀投げ捨て後見送りて怒りをなしてぞ立つ

※柄長く

たりける。ものものしおのれ等に太刀も刀もいるまじや、いざや冥土の供に連れんと、左右の腕をさし出し、彼らを掴んで引き寄せて、左右の脇に挟んで波の底に沈みけり】と先ず教経の最後を謡つてい る。

ついで『源氏の軍兵その数、浮かみてかの御座船には目もかけず、たゞ兵船にぞかゝりける、平家の公達艦舡に立ち渡り矢先をそろへ、切先を並べて寄せ来る敵を待ちかけたり、中にも知盛進み出で、大長刀を莖長に取り延べ、左を薙ては右を払い、多くの敵を亡ぼしけるが、今はこれまで沈まんとて、鎧二領に兜はね、なほもその身を重くなさんと、遙かなる沖の碇大綱えいやえいやと、引き上げて、兜の上に、碇を戴き、海底に飛んでぞ入りにける』と知盛の最後を謡つてゐる。この後半を次のように謡ふこともあります。

ワキ『さても我夜も静がなる折節に、この海際の邊にて、平家の跡を弔う処に、不思議やな今まで無かりし大船浮かみ出で、さも

早朝の海なれども流れもやらず濁ぎもせず、
湯陽の江のほとりなら
ねど、舟船のなかにて弾ずる秘曲、松風にも岩越す波にも、更に紛
れぬ琴の爪音、あら不思議のことやな、一いかに大納言の局、今宵
は波も静かなければ月を觀覽あらんとの御事なり、あの苦取れと申せ、
枕せめては月を松風の、吹くもよしなや苦取りて、夜舟に月を
待とうよ、それ身を觀するときは岸上の草、命を知れば江のほとり
に、繫がざる舟、さるほどに壇の浦の合戦、今は頼みもなかりしか
ば、新中納言知盛、二位殿に向ひ宣いまはこれまで候、御傷はしな
がら行幸を、波の底になし参らせ、一門供奉し申すべしと、涙を抑
へて宣へば、二位殿は聞こし召し、心得て候とて、しづしづと立ち
給ひ、今はの出立とおぼしくて、白き御袴のつま高う召されて、神
靈を脇に挿み宝劍を腰にさし、大納言の局に内侍所を戴かせ、皇居
に参り跪き、いかに奏聞申すべし、この國と申すに逆臣多きところ
なり、見えたる海の底に龍宮と申して、めでたき都の候行幸をなし

申さんと、泣く泣くそりし給へば、さすが恐ろしと思しけるか、龍
顔に御涙を浮かめさし給ひて、東に向はせおはしまし、天照大神に
御暇申させ給ひ、その後西方にて御十念も終わらぬに、二位殿歩み
寄り玉体を抱き目をふさぎて波の底に入り給ふ、恨めしかりし事ど
もを、語るもよしなや跡弔へや僧達と、夜るすがらくどき給ふひし
に、にわかにかき聲り、虚空に聞の声聞こゆ』

これだけ異なることを謡う曲も珍しい。文章としては後のほうが面
白が、碇潛の曲名では相応しくないと思ふ。

長々と謡曲の文を書いたのは、壇の浦の戦いの様は、平家物語より
謡曲のほうがよく表現されているようだ。

このように平氏の一門はみな波の底に消えたのです。

女院も海にいらせ給うが、源氏の舟、漕ぎ寄せて熊手にかけて、引
き揚げる、また、大納言の典侍局、神璽のはいった唐櫃をとつて海
に入らんとし給ふが、武士ども取り留める。平大納言時忠は生捕ら

れていたが、時忠の申出で義経元のごとく収められ、神璽は無事であつた。

生捕られたものは、宗盛、時忠、清宗ら三十八人と女院、北の政所、大納言の典侍殿ら四十三人と伝へられる。

大原御幸(灌頂の巻 小原御幸)

平家物語では、巻十二の後の灌頂の巻と平家物語の最後のところである。謡曲では、出家された建礼門院が、大原の寂光院へ住まわれた。文治二年（壇之浦の合戦の翌年）御白河法皇は、賀茂の祭りの後、大原に行幸なつた。謡曲の『大原御幸』は、このとき建礼門院から壇之浦の合戦の話、安徳天皇のご入水のことなどをお聞きになるところを謡つたものである。

建礼門院は、京へ帰り初めは東山の麓の吉田の辺の住み荒れた、庭

は草深く、軒にはしのぶ茂り、簾も絶えたような住いであった。

昔は玉の臺をみがき、錦の帳に纏われ、明かし暮らさせ給ひしが、今はありしとある人にも皆別かれ、臺かりし波の上、舟の中の御住ひも今は恋しうぞ思し召された。

かくて女院は文治元年五月御髪を下ろさせ給ふうた。

女院は十五歳にて女御の宣旨を蒙りたまわ、十六にて后妃の位に備わり、二十二にて皇子誕生あつて、皇太子に立ち、皇位におつきになつたので、院号を賜り建礼門院とぞ申しける。入道相国の御娘なるうえ天子の母にてもましませば、世の重うし奉ること斜めならず、今年二十九にぞならせましましける。

文治元年長月の末に、かの寂光院に入らす道すがら、まがきの菊のかれがれに、うつろう色を御覽じても御身の上とや覺しけん、かの仮御前の墓所へ参られ、祈り給ひけり。

かゝりし程に、法皇は賀茂かもの祭りの後、卯月二十日余りの頃小原に

行幸なつた。「西の山の麓に一字の御堂あり、これ寂光院なり、蔓
破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燭ともしづかを挑ぐ」という
様なところであつた。「庭の青草茂り合い、青柳糸を乱りつゝ、池
の浮草波に漂い、錦きぬを曝すかと疑はる、八重立つ雲の絶え間より、
山ほととぎすの一声も、君の御幸を待ち顔なり」謡も同じ文章であ
る。法皇これを御覽あつて

池水にみぎわの桜散り敷きて

波の花こそ 盛りなりけれ

と一首くちづさまれ「古りにける岩の絶え間より落ち来る水の音さ
へ、由ありて緑蘿の垣、翠黛の山、絵にかくとも筆も及び難し。

謡では、この処を『かくて大原に御幸なつて、寂光院の有様を見渡
せば、露結ぶ庭の夏草茂りあひて、青柳糸を乱しつゝ、池の浮草波
に揺られて、錦を曝すかと疑はる、岸の山吹咲き乱れ、八重立つ雲
の絶え間より、山郭公の一聲も、君の御幸を、待ち顔なり、法皇池

のみぎはを観覽あつて、池水にみぎわの桜散り數て、波の花こそ盛りなりけれ、古りにける、岩の絶え間より落ち来る、水の音さへ由りて、緑蘿の垣、翠簾の山、絵に描くとも筆にも及び難し、一字の御堂あり、蔓破れては霧不斷の香をたき、樅落ちは月もまた、常住の燈火を挑ぐとはかゝる所か物慶や』『これなるこそ女院の御庵室にありけに候、軒には萬葉、朝顔這いかゝり葵じょう深く鎖せり、あらものすごの氣色やな』とほど同じ文章です。

法皇、「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申す者なし、やゝあつて老い衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ、花摘みに入らせ給ひて候」と申す。「そもそも汝はいかなる者ぞ」と仰せければ、「申すにつけて憚り覚え候へ度も、故少納言入道信西が娘、阿波の内侍と申すものにて候なり」。法皇は女院の御庵室に入らせられると、その一間には来迎の三尊が祭られ、色紙に大江定基法師の詠じた、

「せい笙歌遙かに聞こゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前」と書かれてあつた。この句は『大原御幸』の『寂光院』の小書きがついたときによく語られる。

やゝあつて濃き黒染めの衣着た尼二人、岩の懸路かけじを傳ひつゝ帰つてこられた。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を押おさえて「花籠臂はながたきひにかけ、岩つづじを持たせ給ふは女院にてわたらせ給ふ、爪木に蕨折り添へて持ちたるは中納言維実の娘、五条大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局なり」と申された。

この辺りは謡曲も全く同じ文章である。平家物語の良い文章は、そのまま謡曲に取り入れてある。『一年の窓の前には、根取の光明を期し、十年の柴の樅には、聖衆の来迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かな』の後は、平家物語と少し異なり、大原の里の四季の様ロンギ（シテとち謡の掛け合）で語う。

女院は重ねて申さ給ひけるはからは、平家物語も謡曲も平家一門が

西海に落ち、最後には、皆々 大海に沈み沈み果てた様を書かれ、謡つ
て いる。文 章は前 の用に同じ文でははないが、いづれも口調の良
い、
うつくしい文 章である。何れも長いので割愛する。

正尊（巻十二土佐坊斬られ）

さて義経は京へ凱旋したのですが、元歴二年五月、大臣親子を連れ鎌倉へ向かいました。しかし先に鎌倉へ帰った梶原景時が頼朝に讒奏したので鎌倉の七里浜付近に闘を作り、大臣親子を受け取り、義経は鎌倉の東南片瀬へ追つ帰された。「正尊」に【義経を鎌倉へも入れられず道より追い返へされし事】と謡はれています。

この後の曲は「正尊」になるのですが、平家物語は、巻十二土佐坊誅（きられ）になっています。

謡の「正尊」は平家物語の「土佐誅」の項とほとんど同じです。

「さる程でに、九郎判官には、鎌倉殿より大名十人付れられたりけれども、内々御不審蒙り給ふ由聞こえしかば、心を合わせて一人づつ皆下り果てにけり。兄弟なる上、殊には父子の契りをして去年の正月木曾義仲を追討せしよりこのかた、たびたび平家を攻め落とし、今年の春滅ぼし果てて一天を静め、四海を澄ます。勸賞行はるべき

*上の人に他人の事を告げ口する

所に、いかなる子細かあつてか、かかる聞こえあるんと、上一人を
を始め奉て、下萬民に至るまで不審ふしんをなす。

このことは、去んぬる春、摂津国渡辺より船汰ふなざらへして八島へ渡り給
へひしどき、逆檣たてうたてじの論をして、おゝきにあさむかれた
りしを梶原遺恨いごんに思ひて常に讒言ざんげんしけるによつてなり。定めて謀反むほん
の心もあるらん、大名共差し上せば、宇治・瀬田の橋をも引き、京
中の騒ぎとなつて、中々あしかりなんとて、土佐房昌俊のぶとしを召して、
「わ僧上もうじやうつて物詣ものまつりする様にて、たばかつて討のたまて」と宣ひければ昌
俊畏かしこまって承る。宿所へも帰らず、御前ごぜんをたつてやがて京へぞ上り
ける」とまずあります。

重複するようですが、謡の「正尊」では、曲の初めにワキわきが、
『さても我が君判官殿は、鎌倉殿より大名十人つけ申されて候へど
も、内々御仲不和になり給へふにより、心を合わせて一人づつ皆下おろ
り果てて候。さても去年の正月木曾義仲を追討せしよりこのかた、

たびたび平家を攻め落とし、今年の春滅ぼし果てて一天を静め、四海を治ます勸賞行はるべき所に、渡辺にて梶原が逆檣の意見を承引し給ふはざりし遺恨により、和が君（こう）を謹奏（さんそう）申し、御仲不和になり給ひて候』（一）下略 その後も同じ文章がよく出てきます。

さてこの正尊という曲の物語は、正尊は都へ着いたのですが次の日まで義経のところへ行かなかつたので、正尊が都へ着たことを聞いた義経は、弁慶に「何とて御伺に来ないかと」迎えにやります。

弁慶に連れてこられた正尊に義経は『いかに土佐坊珍しや、さて何のために上りてぞあるぞ、鎌倉殿より御文はなきか』と尋ねますが正尊は「さん候差したる御事も御座なく候間、御文は参らず候、言葉に申せと候ひしは、都に別の子細なく候こと、偏に御渡り候ゆえと思し召し候、構へてよく守護させ給へとこそ御詫候ひつれ』 義経「よもさはあらじ、義経討ちに上りたる御使いとこそ覚えたれ』（二）弁慶「大名どもを差し上せられ候はゞ、宇治瀬田の橋をも引き、都（と）では京都

の騒ぎとなつては悪しかりなんと思し召し土佐坊上つて物語でする

様にて、※たゞ誰かつて討ち申せとこそ仰せ候ひづらめ』と正尊を詰問し

ます。

そこで正尊は嘘でない証拠に起請文を書きます。

判官は磯の禪師の娘の静を寵愛されていましたが、正尊に酒を薦め

静に舞いを舞わせた後、正尊を宿所に帰します。

話でも【只今土佐が宿所を見せに使わし候と頃に】とあります

平家物語によると、六波羅の禿を三四人土佐坊の宿所を見にやりま

すが、帰つてきませんので、はした者を再び行かせます。その者は

「禿は門の前で切られており、宿所の中には、弓を張り、矢を負ひ、

皆物具し、物語の氣色は見えません」と報告しましたそこで義経は

太刀を取り、中の門を開かせ寄せてくる土佐坊の軍勢を待ちます。

そこへ土佐坊の軍勢が攻めできますが、弁慶は『いかに土佐坊確か

に聞け、さても書きつる偽起請の、罰を忽ち与ふべし、いざ一太刀

※あさまむい

※神仏に誓い
書く誓紙

※遊女に仕える
少女

と呼ばはれば】と戦いになります。能でこの戦いの様子は見て、大変面白いです。また、謡ではこの起請文を謡うのが非常に難しいとされています。

平家物語では、戦いに破れた土佐坊は鞍馬の奥の僧正ヶ谷へ逃げました。ここは義経の故郷ですから、すぐに捕まり義経の元へ送られます。

平家物語にちょっと面白い話が書かれています。頼朝は土佐坊が討たれた報を聞く、レ・テ舍弟の範頼に討手に行けと命じますが、辞退します。再度命じられたが、力及ばずと物具して暇を申し出ます頼朝は「和殿ハヂミも九郎が真似マジナリをし給ふなよ」といわれ、その言葉に恐れて物具を脱ぎ起きて、京上りは留まり給ひぬ。全く不忠なき由一日十枚づつの起請を書き、百日に千枚書いて參らせられけれども、叶わずして遂に討たれ給ひけり、とあります。

舟弁慶

(判官都落ち)

この後「判官都落ち」ですが、謡では「舟弁慶」という曲になります。

判官は十一月二日、御所へ行き、「義経君の御為に奉公の忠をいたすも、頼朝、郎等共の讒言によつて義経を討たんと仕り候ふ間暫し鎮西のほうへ下らばやと存じ候」といっています。このようなことが「舟弁慶」という曲に弁慶が【我が君親兄の礼を重んじ給ひ、ひとまず都を御開きあつて、西国へ御下向あり】と言わせている。

平家物語によれば、四日大物の浦より舟にて下られけるが、おりふし西の風烈しく吹きければ、判官の乗り給へる舟は住吉の浦へうち上げられた。判官の都より具せられたりける十余人の女房達をば、皆住吉の浦にて捨て置かれたりければ、こゝやかしこの松ノ下、砂の上に倒れ臥し泣きいたりけるを、住吉の神官これを憐れみ、乗りものを仕立て都へぞ送りける。

西の風忽に烈しう吹けるは、平家の怨靈とぞ聞えし。このことが謡曲『舟弁慶』の構想となつた。これは謡本にも、そう書かれているし、さらに「義經記」巻四「義經都落ちのこと」には、更に詳しく記されていると書かれている。

謡曲『舟弁慶』は、他の曲と異り「平家の怨靈とぞ聞えし」ということよりの発想で、後シテに平の知盛の亡靈が波間に現われ義經の一行を自分が壇之浦で沈んだと同様に、海に沈めようと斬つてかゝる、これに果敢に切りむすぶ義經を弁慶は押し隔て、打物業にては亡靈相手では叶はないと、祈りに祈ると怨靈は遂に祈り退けられ引く潮と共に跡知れずに消え失せる。

前半は、後半に豪壮さを表わすため、前半では悲哀さを表わそとと平安物語とは違い、舟に乗る前に静との別れとしたのであろう。ワキの弁慶に『恐れ多き申し事にて候へども、まさしく静かは御供と見え申して候、今の折り節何とやらん似合わぬように御座候へば、

あづばれこれより御返しあれかしと存じ候』と言わせている。

そして別れの宴を催し、クセの語で、昔の支那の物語の陶朱公は、
会稽山に具に大敗した越の王勾践と長い年月隠れ住み、遂に具を滅
ぼし、のちに、江湖に舟を浮かべ、悠々自適の生活を送ったとい
う物語を語る。義経も一時隠れ住み、頼朝の許しを待つという気持ち
を、この物語の例を引いて現わしていると思われる。そして静は泣
く泣く義経と別れる。という哀れさを現わす。

静との別れを惜しみ、今日は波風が荒いから逗留すると言う義経に
対して、弁慶は『その上一年渡辺福島※を出しとき、以ての外の大風
なりしに、君御舟を出し平家を滅ぼし給ひし事、今以て同じ事をか
し、急ぎお舟を出すべし』と舟出する。舞台のワキ座の前へ舟を出
し、義経、弁慶などが乗り込む、初めはのんびりと狂言の船頭との
会話があり、そのうちに波が高くなり、船頭が懸命に舟を漕ぐ、

『あら不思議や海上を見れば、西国にて滅びし平家の一門、各々浮

※屋島に向かう
とき

かみ出でたるぞや、かゝる時節を窺ひて、恨みをなすも理なり、
「今更驚くべからず、たとひ惡靈恨みをなすとも、そもそも事のある
べきぞ』ここで早笛という、竜神などの出場に用いるさつ笛と急テ
ンボの囃子に乗り平の知盛の亡靈が出てくる。この曲の一一番の見せ
所である。この曲に『前後の替』『重き前後の替』という小書があり、
それぞれこの後シテの出場の仕方が変わつてくる。それによつ
てシテの位が重くなる。見て非常に面白い能である。

平家物語では、住吉の浦にうち上げられた義経一行は吉野へいった。
しかし吉野法師に攻められて、奈良へ落ちた。ここでも奈良法師に
攻められまた都へ帰つてきた。それから奥州へ向かい、安宅の関を
越え、奥州の藤原秀衡を頼つた。

先に書いた『摂待』はこの道中のことである。

忠信・吉野靜・一人靜

『忠信』の曲の初めに、『さても我が君判官殿は、この吉野を頼み御座候處に、衆徒の詮議^{しんぎ}變わり、今夜夜討ちすべき事一定の様に申し候』とある。このことを義経が知り、『とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし』誰か一人留まり防ぎ矢を射、その後命を全うし、路次^{ろじ}にて追つづくべき者やある』といふ。そして佐藤忠信が選ばれる、忠信は『御意^{じょうい}をばいかで背くべき、しかも一人選まれ申し、防ぎ矢仕れとの御誕^{じょうとう}、弓矢取つての面目なれば、忝うこそ候へとよ、さりながら、我が君を始め奉り、皆人々にお名残りこそ惜しう候へ』と涙をおさへる。後半で義経を召し取ろうと攻めてきた衆徒を相手に、忠信は奮戦し、暗さを頼りに飛鳥の事く走り翔つて、義経の向かつた都をさして急いだ。

『吉野靜』は、義経が吉野を落ちるところを謡ふが、『忠信』では忠信が防ぎ矢の奮戦をしたとしているが、『吉野靜』では、衆徒の

集まつてゐる所へ出で、十二騎で落ちた義経らを追つかけ討とう
『十二騎と申すとも、其の勢の百騎二百騎にも対ふべし。かやうに
申す御の者、當口を信じて參る上は、いかにも御寺も宿坊も、難なく
おはしませかし」と、酒へぬかやうに申すなり』と衆徒をなだめ静に
舞いを舞わせ、義経らの落ちゆく時間稼ぎの謀計をするという曲で
ある。その舞（クセ）で『そもそも景時が、その讒言の水上を、思
へて渡邊や、ながる水に萬葉の、逆襲立てんと浮舟の、堀原が申
し、よも順義にて候ひに、されば義経は、直に治めし三吉野の、
神の誓ひの真あらば、頼朝も聞こて、直にされ義経、執節の勅を
受け、洛陽の西南はこれ分国となるべし、あらば當口の、衆徒悉
忠なし給ふな御料は、はに、但し衆徒中に、なお憤り深うして、
進みて迫つかれ給ふと、その名聞こゆる人々を、討ち止め申さん
な、片頭壇尾聲の風吹は、忠信は雙びなき、精兵ぞよ人々に、防ぎ

矢射られ給ふなど、語ればには衆徒中に、進人こそなかりけれ』と謂い『しがやしがや、賤のお寺てら院いん繰り返し、昔が今日、なす由ゆもがな』と舞う間に、義経は難無く落ちていった。

同じ場面を『忠信』と全く異なる曲趣として現わしている。

『二人静』吾妻鏡では文治元年十一月十七日の条で静御前は吉野山で義経に別れたこととなつてゐる。大物の浦にて別れた静が、この山に着て、五日逗留し處、衆徒蜂起の由を聞き山伏姿で逐電した。

静かに対して執行は同情し労した。しかし、どうしても鎌倉へ送らねばならぬとあって、折りから上京中の北条時政の元まで差し出した由が記せられている。このようなことを脚色していの曲が出来たのであろうと書われてゐる。

この曲の中に『判官殿の身内の人は多き中にも、殊に衣川の御最後まで御供申したりし』と義経の最後が、衣川と初めて出でくる。

三吉野の勝手明神の神職が、正月七日の神事にそなえる若菜を摘みに女を菜摘川へ行かせたところ、一人の女が現われ、社家の人に一日経を書き我が跡を弔つて下さるようとにと、伝言をたのみ、もし疑う人があれば、そのとき私はあなたに憑いて名を明かしましようと消えて行く。

その女が帰り、神官に『真しからず候程に、申さじとは思へども』といふと、突然『なに真しからずとや、うたてなやさしも頼みしかひもなく、真しからずとや』と先の女がとり憑く。そして私はこの山まで御供した静であるといふ、そして『我か着し舞の装束をば、勝手の御前に納めしなり。』さて舞の衣装は何色ぞ。『袴は精好^{せいこう}』
ヨリ『水干な^{シナ}世を秋の野の花盡くし』ヨリ『これは不思議のことなりとて、宝藏^{ほうざう}を開き見れば、げにげに疑ふ処もなく舞の衣装の候』とその装束を取り出すと、静の靈が現われ、二人で『しづやしづ、賤のお芋環^{だいじゅわん}、繰り返し、昔を今に、なす由もがな』と謡い、舞ふ。

精好織
練糸で織った
綿、地質厚く
に用ひた

『思ひかへせば、いにしへも、恋しくもなし、臺きことの、今も恨みの衣川、身こそは沈め、名をば沈めぬ、武士の、物事に憂き世の、習ひなればと思ふばかりぞ山桜、雪に吹きなす、花の松風、静が跡を弔ひ給へ』と消えて行く。

この曲は能の常套手段を避け、静の靈と、その靈が憑いた女と二人が現れる怪奇さを狙ったと思われる。

義經は衣川で自害して果て、武士とはいへ、武士としての名はいつまでのも残していりうるまで

初瀬六代はつせ ろくだい（卷十二 初瀬六代のこと）

謡曲の『初瀬六代』は乱曲（上、中、下）と、三曲（初瀬六代、東国下り、西国下り）が重習おもなましとして、難しい曲とされている。

謡曲は、普通一つの物語を、主役（シテ）、脇役（ワキ）、合唱部分（ヘ地謡）という役割があり、その物語をすゝめてゆくのである。

曲の中には、文章も美しく、節も面白い一節を独吟といつて、一人で詠うこともある。乱曲、三曲ともそのようなものであるが、曲の中の一節ではなく、そのものが一曲となっている。

大体に於て、平家物語などの曲としての筋書きでなく、その中の一部分を詠ふ。

平家物語の『初瀬六代』では、高尾の聖文覚坊が、小松の三位中将維盛の子息六代御前が鎌倉へ引かれるのを助け戻り、母に引き合わせると言う物語である。謡曲の『初瀬六代』の筋書きも、同じではあるが、文章は全然異なる。例へば「伝へ聞く孔子は鯉魚に別れて、

思ひの火を胸に焚き、白居易は子を先立て、枕に残る薬を恨む、これ皆仁義礼智信の祖師、文道の大祖たり」とか、子を失う気持ちをクセの謡で『初瀬の鐘の声、つくづく思へ世の中は、諸行無情の理^{ことわり}假に見ゆる親子の夢幻のときの間と、かねてはかくと思へどもまこと別れになる時は、思ひし心もうち失せて、ただくれくれと堪へかぬる、胸の火はこがれて身は消ゆる心のみなり』と良い文章である。

東国下り

これは平盛久が、鎌倉に送られる道中を謡つたもので、『盛久』の曲の中にも、逢坂の関をこえ、瀬田の橋を渡り、熱田八橋、大井川箱根山を越える道中を謡ふが、東国下りでは、その道々の景色を古事を引き修飾を加えてた文章になつてゐる。

西國下り

これは寿永二年の秋、平家が西海へ落ち行くとき、かつての福原の都の荒れ果てゝいる様子などを詠ひ、さらに九州へ落ちて行く道中を詠ひ、曲は『月落ち鳥啼いて、霜天に満ちて冷しく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響きは、客の船にや通らん蓬窓雨滴りて知ぬ沙路の楫枕、片敷く袖や萎るらん荒磯波の夜の月、沈みし影は帰らず』と終わっている。

亂曲 阿古屋の松（一巻二 阿古屋の松）

平家物語の「阿古屋の松」は、日本は昔三十三箇国にてありしを、中頃六十六箇国には分けられたりなん。出羽陸奥も一国であつたが陸奥と出羽に分けられた。きねかた實方中将が、奥州へ流されし時、当國の名所阿古屋の松を見んとて、國のうちを尋ね回つたがむなしく帰る途中、一人の老人に会い、尋ねると

※唐詩選、張繼の楓橋夜泊の詩より
窓の苦を蔽うた船

陸奥の阿古屋の松に木隠れて

出づべき月の出でもやらぬか

と云う心から、当國の名所阿古屋の松と尋ねたのでございませぬか、
その歌は、陸奥と出羽が一つの国であつた頃詠まれた歌で、いまは
阿古屋の松は出羽の国です。と教えられ出羽の国へゆき阿古屋の松
を見たと云う話がのつていて。そこから『阿古屋の松』といふ謡を
作つたのではないだろうか。松の由来、高砂住吉、三保の松原の松と
阿古屋の松とはちまいものであると謡つていて。

即ち『秦の始皇の御辭に、伊太のほどの木なりとて、異国にも本朝
にも、こり木を賞翫す』『高砂住吉辛崎よりの富士も東そと、三保
松原栗原や……あわれ阿古屋の松蔭の名高きや類ひなかるらん』と
謡つていてる。

秦の始皇帝が
下風雨の難を松
に封じた故事夫
に封じた故事夫

あとがき

『春栄』に、『これは武藏の国の住人、増尾の太郎種直にて候、さても宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ、その矢を抜かんと少し傍ら引き退き候間に、弟にて候春栄深入りし、やみやみと生捕られて^表あるので、平家物語には名前さへ出てこない。

色々調べてみたが、観世本にも典拠不明、治承、寿永、承久と三度あつた宇治橋の合戦に、本曲にあるような事実はどの戦記物語にもないと書かれてある。

平家物語より取材された謡曲は、実に三十余曲になる。

源氏物語からの取材も多いと思うが（まだ、平家物語のように読み返してない）これ程ではないと思う。

平家物語であるから当然平家の人々が、中心に書かれてあるから、誰由の主人公も平家の人が多いのは当然であるが、戦物が多く半分以上である。その中で純粹に勝ち戦は屋島一曲である。（木曾も勝

の部に入れて二曲にすぎない）一ノ谷の合戦は、八曲もある。これは若い公達らの討死の哀れさを強く感じた作者の気持ちの現われであろうか。面白いのは、清盛も、頼朝も謡曲の役としては出てこない。義経で主役は屋島一曲である。後はツレとか子方である。

こんなことを考えると、なかなか楽しい。

ちなみに、義経の出てくる曲は、子方で「鞍馬天狗」「熊坂」「鳥帽子折」「船弁慶」「安宅」である。ツレは「正尊」「忠信」「摂待」である。

作者別に見ると、ほとんどが世阿弥である。禪竹は忠信、觀世小次郎信光は船弁慶、正尊は弥次郎長俊、生田敦盛は禪凰である。

作者別に曲題を分析するとまた変わった面白さがあるだろうが、各人でお考え頂くことにしたい。

朱 醒 宇 光 陽 清 文 仁 淳 蟻

雀翻多幸成和德明和峨

天長 弘仁 承和 嘉詳 延長 昌泰 延喜 寛平 仁和 元慶 貞觀 仁壽 於衡 天安

9 9 9 9 8
3 3 2 0 9 9 8 8 8 8 5 7 5 5 5 5 5 5 4 3 3 2 2 0
0 1 3 1 7 8 9 7 4 5 8 7 8 9 7 4 0 1 8 3 4 3 4 9

一 花 内 冷 村

上泉融山

寬弘	天曆
長保	天德
正祐	天慶
永祚	承平
永元	天曆
天元	天德
永觀	天慶
寬和	天曆
貞元	天德
天延	天慶
天綠	天曆
安和	天曆
康保	天德
應和	天慶

三
後一条
後朱雀
後冷泉
後三条
白河
橫河

長和 寛仁 治安 万寿 長元
長曆 寛德 永承 天喜 延久
治曆 泰平 承保 永保 忠德

近

崇

鳥

衛

德

羽

久天康 永保長天大天 保元永天 天 嘉長康承永嘉寬
安養治 治延承承治治 安永久永仁 承治和德長保治

3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	4	4	4	4	4	3	3	3	2	2	2	1	1	1	1
1	5	4	2	1	5	2	1	6	4	0	8	3	0	7	6

後鳥羽

安高六
德倉條二後白河
條

建文元
久治曆

壽	養	治	安	承	嘉	仁	永	長	應	永	平	保	久	仁
永	和	承	元	安	應	安	萬	寬	保	曆	治	元	壽	平

3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	9	8	8	7	7	7	8	6	5	6	6	6	6	5	5
9	0	5	5	2	1	7	5	1	9	6	5	3	1	0	9

四
条御仲順
堀河恭德

土御門

延曆嘉文天 貞寬安嘉元貞 承建建 承建元建正
応仁禎曆福 永喜貞祿仁応 久保曆 元永久仁治

3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
4	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	1	1
0	9	8	5	4	2	3	2	9	7	5	4	1	9	3	1

後
二
条
伏
見
後
宇
多
見
龜
山
後
嵯
峨
後
深
草

嘉	乾	正	永	弘	建	文	弘	文	正	正	泰	建	寶	寛	仁
元	元	安	仁	正	安	永	長	応	嘉	元	嘉	元	長	治	治

1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
0	0	0	0	9	9	8	7	7	6	6	5	5	5	4	3
6	3	2	9	9	8	7	7	6	6	5	5	5	4	7	3

後	長	後	後											花	(機三)
龜	村	醍醐	醍醐											園	
山	上														
慶															

弘	天	文	建	正	興	延	建	元	元	正	應	延	德	
和	授	中	德	平	國	元	武	弘	嘉	中	亨	長	慶	治

1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
8	8	7	7	7	6	4	9	4	3	3	2	2	2	1	0
4	1	5	2	0	8	6	0	6	4	2	9	6	4	2	8

後	[北]	後	[北]	崇	[北]	光	[北]	光	[北]						
円		光	嚴												
融															

永	康	永	"	応	貞	康	延	文	觀	"	貞	康	曆	正	
德	曆	和	"	安	貞	安	治	安	応	"	和	永	応	慶	元

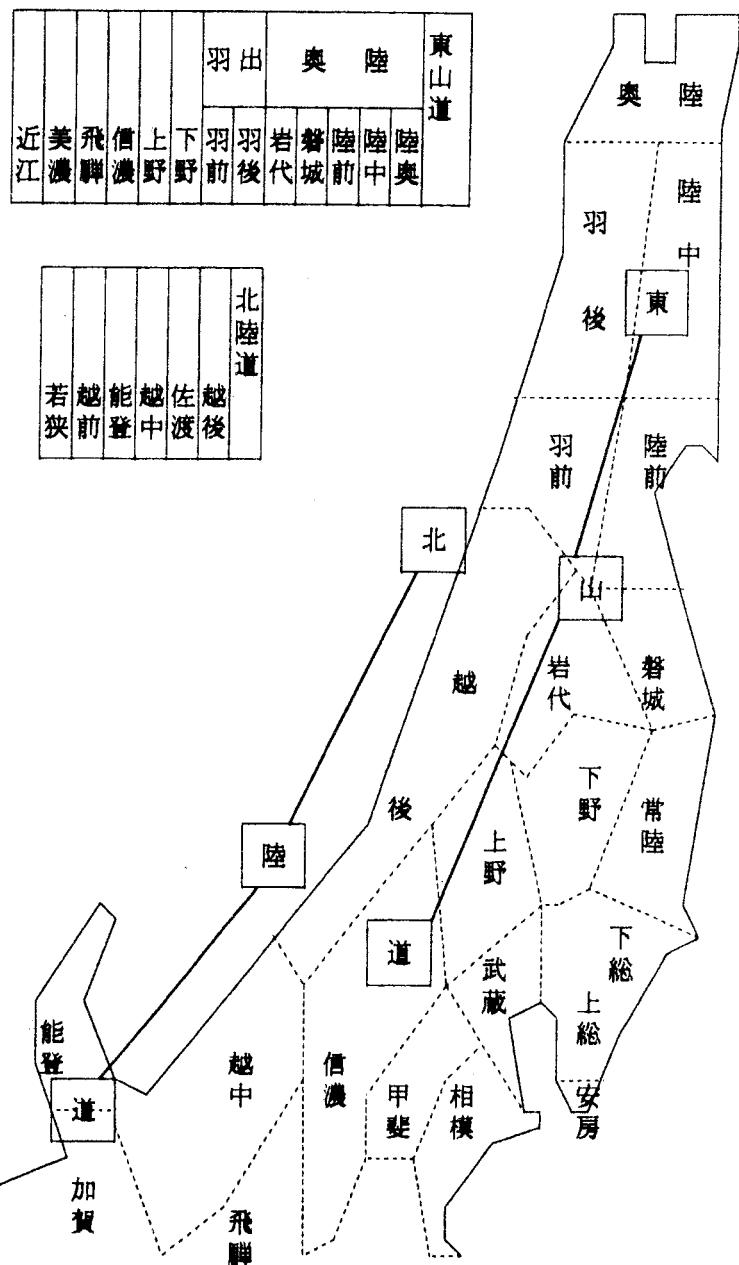
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
8	8	7	7	7	6	6	5	5	5	4	4	4	4	3	9
2	1	9	5	1	8	2	1	6	20	8	5	2	3	2	2

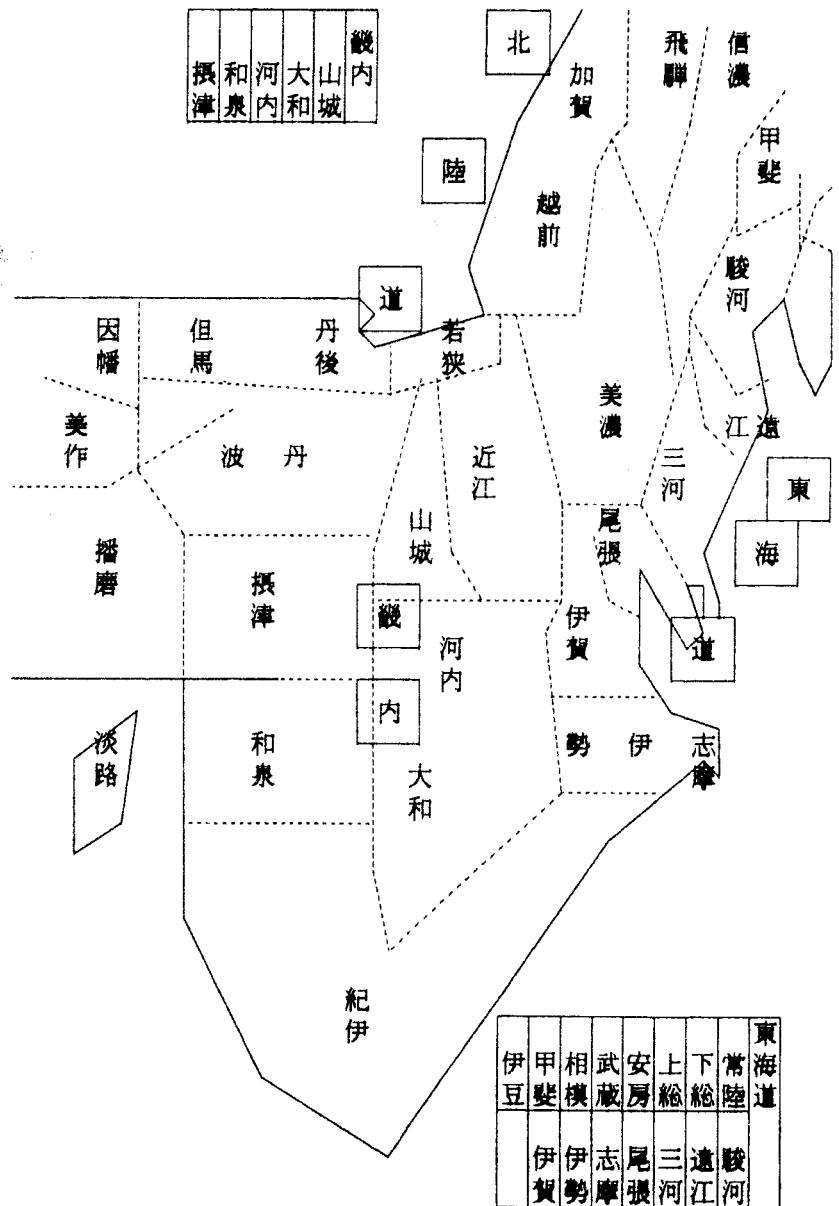
後土御門	後花園	称光	後小松	室町	後小松	北			
文応文	寛長康享宝文嘉永	正	応明	時	明康嘉至永				
明仁正	正禄正徳徳安吉享	長	永徳		徳応慶徳				
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1				
4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3				
8 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4 4 2 2 1 9	8 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4 4 2 2 1 9	8 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4 4 2 2 1 9	8 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4 4 2 2 1 9	8 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4 4 2 2 1 9	9 9 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8				
7 9 7 6 4 0 7 5 2 9 4 1 9 8 2 4	7 9 7 6 4 0 7 5 2 9 4 1 9 8 2 4	7 9 7 6 4 0 7 5 2 9 4 1 9 8 2 4	7 9 7 6 4 0 7 5 2 9 4 1 9 8 2 4	7 9 7 6 4 0 7 5 2 9 4 1 9 8 2 4	2 0 9 7 4				
後水尾	後陽成	正親町	後奈良	後柏原	(後主御門)				
江 戸 時 代	(正親町) 安土 桃山 時 代								
寛元	慶文	天正	弘治	天享	大永	文明	延長	応徳	事
永和	長禄	天正	文禄	文禄	永正	正龜	永正	正龜	
1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1
6 6 6 6	6 5 5 5	5 5 5 5	5 5 5 5	5 5 5 5	5 5 5 5	5 5 5 5	5 5 5 5	5 4 4	4 4 4
2 2 1 1	0 9 9 8	7 7 7 7	5 5 5 3	2 2 2 0	2 2 2 0	2 2 2 0	2 2 2 0	0 9 8	9 8
9 4 5 1	3 6 2 6	3 0	8 5 2 8	6 1 4	6 1 4	6 1 4	6 1 4	1 2 9	2 9
桃園	桜町	中御門	東山	靈元	後西	後光明	明正		
延寛元	享正	宝元	貞天	寛万	明承	慶正	寛永		
享保文	保徳	永禄	享和	文治	暦	応安	保永		
1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1
7 7 7	7 7 7 7 7 7	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6	6 6 6 6 6 6
4 4 4	3 1 1 0 0	8 8 8 7	6 6 5	8 8 8 7	6 6 5	5 5 4	5 5 4	4 4	4 4
8 4 1	6 6 1 9 4	8 4 1 3	3 1 8	8 4 1 3	3 1 8	5 2 8	5 2 8	4 4	4 4

光	後	後
桃	桃	町
圓		
格		
文享寛天	安	明
化和政	永	和
延		
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
8 8 8 7 7 7 7 7 7 7 7 7		
1 0 0 8 8 7 7 7 6 8 5		
8 4 1 9 1 9 2 0 4 2 1		
	孝	仁
	明	孝
慶元文万安嘉	弘天文	
應治久延政永	化保政	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8		<small>18</small>
6 6 6 6 5 4 4 4 3		<small>17</small>
8 5 4 1 0 4 8 6 4 0		
今昭大	明	
上和正	治	東
平昭大	明	京
成和正	治	時
1 1 1		
9 9 9		<small>1807</small>
8 2 1		
9 6 2		代

文治元	文治元	全元(壽永二年)	全元	全元	全元	全元
一一八五	一一八五	一一八四				
一一一九三 一一七二八	一一一九三 一一七二八	一一一九八	一一一九八	一一一九八	一一一九八	一一一九八
平重衡を鎌倉に送る	平維盛、那智の海に身を投げる 源氏兒島で平家と戦ふ 義経渡辺より船出す 屋島の合戦、佐藤嗣信討死	平家一ノ谷を居城にする 一ノ谷の戦いで平家破れる	頼朝に宣旨を下し平氏を討た 義仲栗津にて討死	義仲宇治・瀬田を守らせる 範頼・義経京に入る	義仲の軍水島にて破れる 生ずきの沙汰	水島合戦 宇治川の先陣
嗣信 //	逆櫓 藤戸	海道下り	坂路とし、忠度の坂 忠度、如宗 の最後	木曾の最後		
(年代不明)						
攝景屋島 待清島	藤戸	熊野 千手 経正 紹正 盛知 通手 教盛 教盛 兼平	忠度 篠原 千手 経正 教盛 通手	巴		

天皇	年号	西暦	月日	壇之浦の合戦	事項	平家物語	謡曲名
				義経・宗盛等を連れ鎌倉に下る	腰越		
	文治二年三月二八六	一一九五七年四月	十一月二五七	義経酒匂川に着く 頼朝土佐正尊を京に遣わす	土佐斬られ		
				吉の浦に流れつき吉野山へ落ち	大原都落ち		
	後白河法皇大原に建礼門院を訪ねる	大原御幸	正尊	大原御幸	忠信	忠信	忠信
	義経安宅の関に差しかかる	平家物語にはない	正尊	大原御幸	喜時	喜時	喜時
	初瀬六代	安宅	正尊	大原御幸	三人郎	三人郎	三人郎

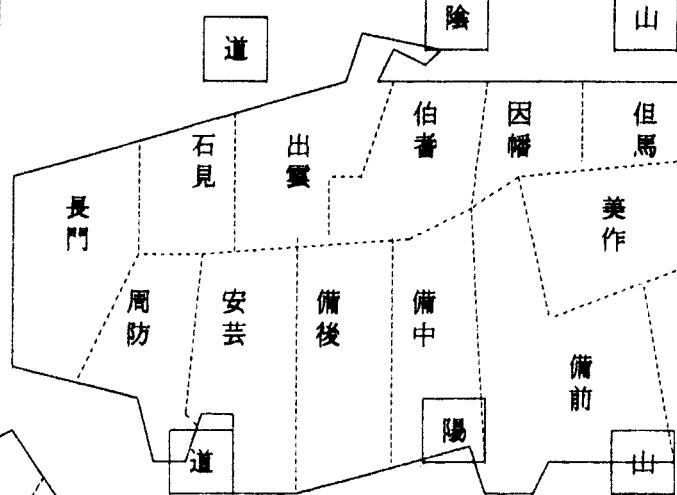
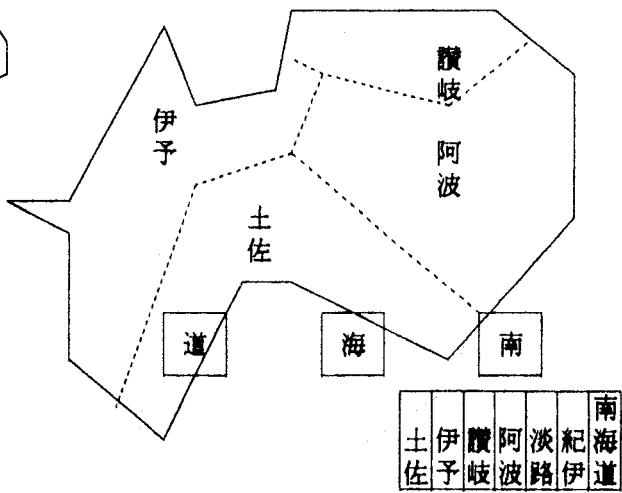
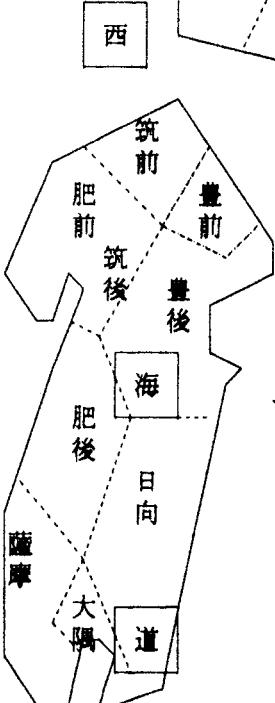




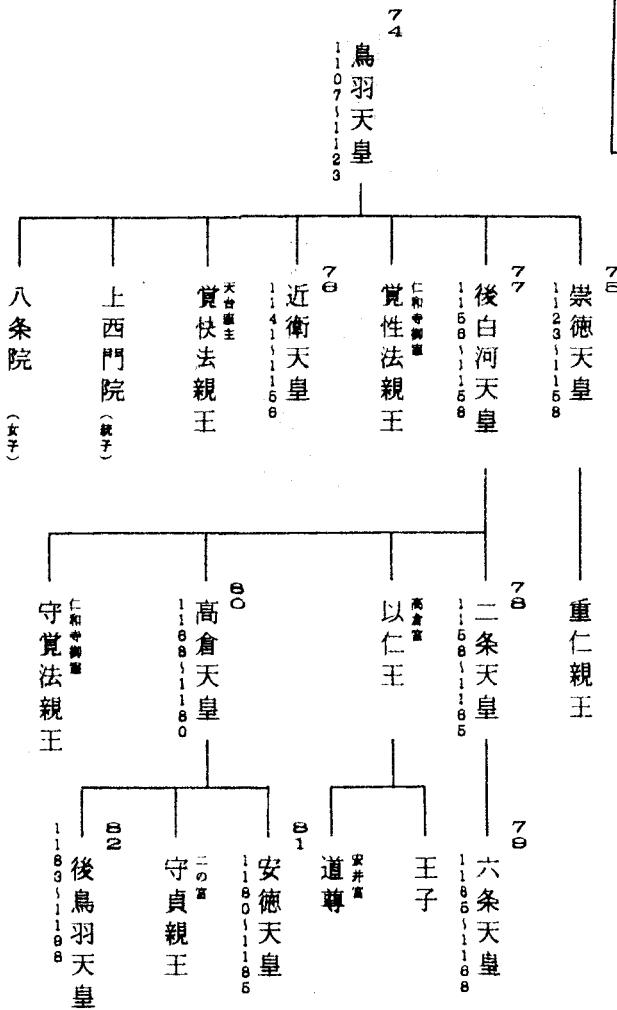
豐後	筑前	筑後	西海道
肥後	對馬	壱岐	肥前
琉球	薩摩	大隅	日向

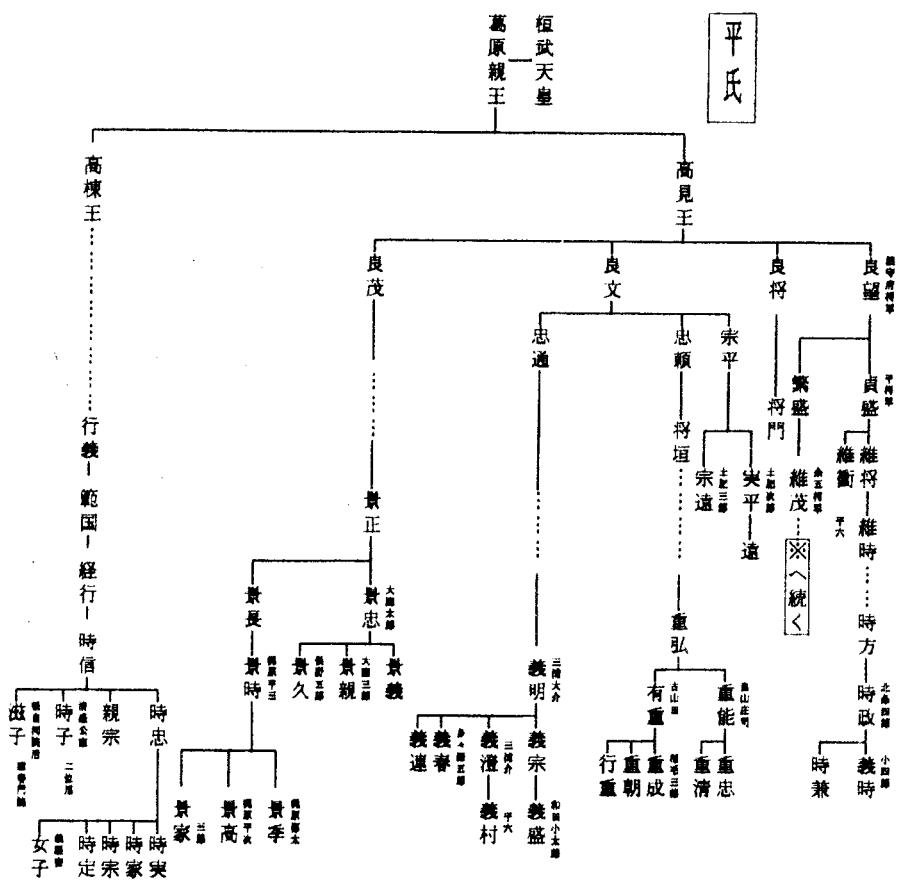
隱岐	石見	出雲	伯耆	因幡	但馬	丹波	丹後	山陰道
----	----	----	----	----	----	----	----	-----

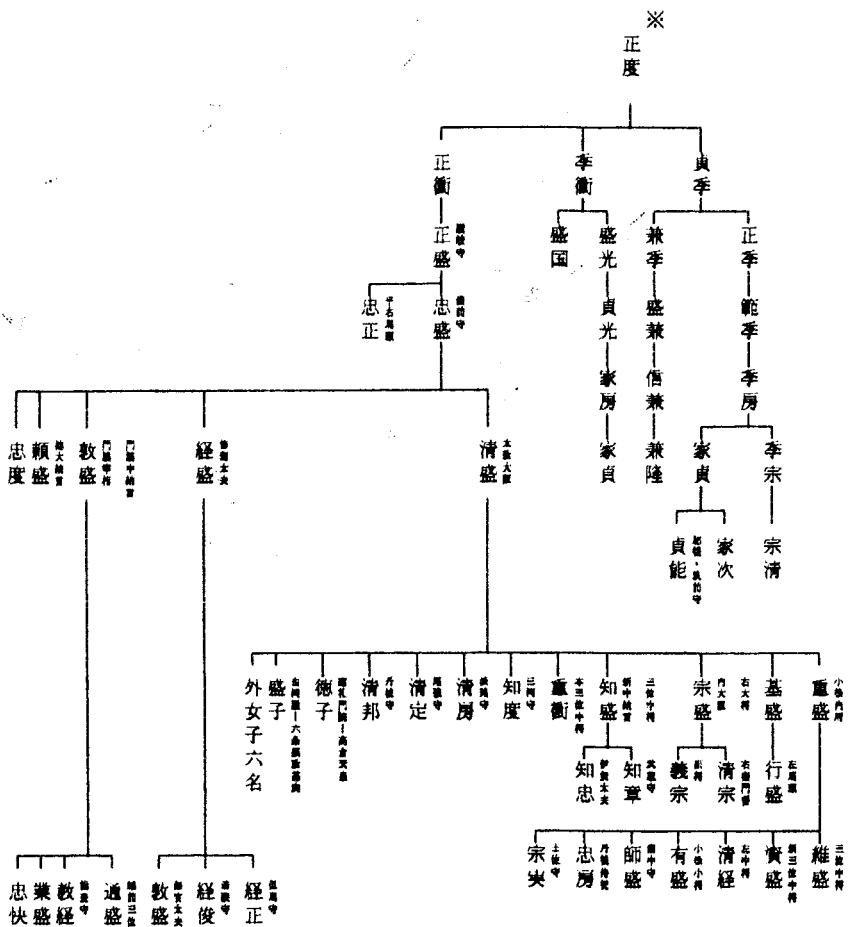
長門	周防	安芸	備後	備中	備前	美作	播磨	山陽道
----	----	----	----	----	----	----	----	-----

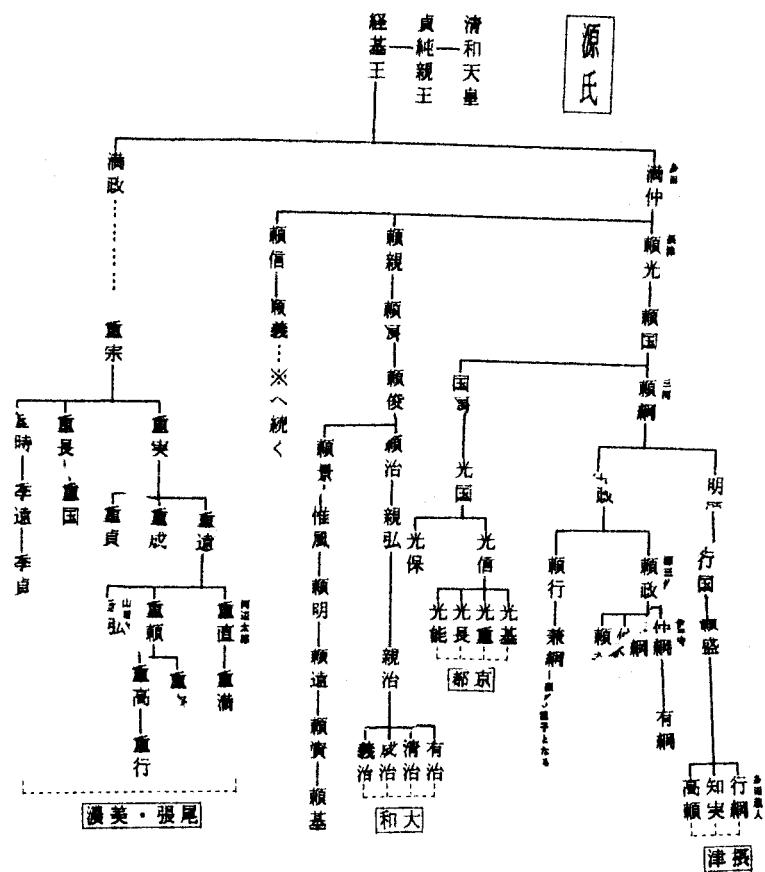


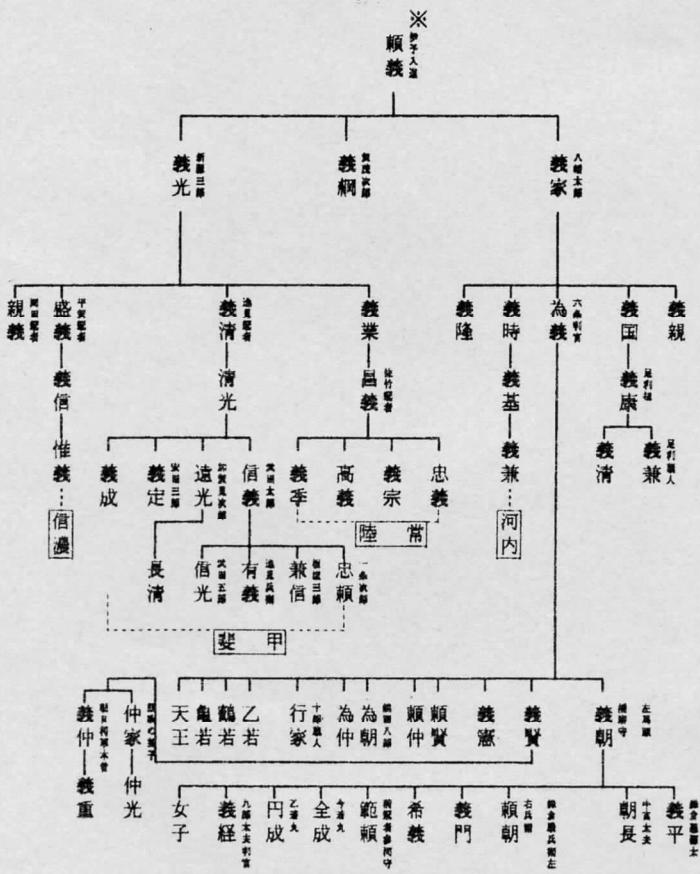
皇室

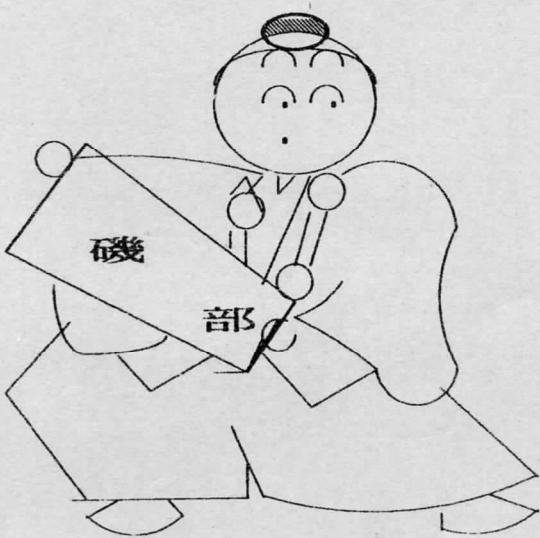












平成6年5月1日 磯部武夫著
平家物語と謡曲

限定出版

非売品